仙台市文化財調査報告書第37集

仙台平野の遺跡群 I

――昭和56年度発掘調査報告書――

１９８２年３月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第37集

仙台平野の遺跡群 I

——昭和56年度発掘調査報告書——

１９８２年３月

仙台市教育委員会

序　文

名取川・広瀬川流域に広がる仙台平野は、海洋の影響を受けて温暖な気候をもち、住みやすい土地柄になっている。市域内には5～6万年以前から人間が生活の場として選地し、縄文、弥生時代を経て、現在まで連綿としてその歴史を展開していたことを論証出来る遺跡が数多く分布している。

しかし、近年の状況として、市街化の拡大に伴う開発行為が増大し、それら遺跡群と係る開発も少なくない。これらの遺跡は、人類が歩んできた歴史の足跡であり、これを科学することによって当時の生活文化を認知し、将来の文化創造へのヒントを得ることができる重要な資料であることは言うまでもない。

最近そうした遺跡を中心とする文化財全般にわたって、年々開発の波が押し寄せていることは否めない事実である。このことから文化財の保護・継承と開発の問題は行政上の重大な課題になってきている。本市教育委員会も行政上の組織化やルール化・調整にたゆまぬ努力を傾注している。

本書は、国の補助を得て250件以上の届出のうち、保護行政上の指導を施しながらも、どうしても調査を実施しなければならなかった件についての調査報告である。これらの調査、整理、報告書の作成に当っては多くの方々の協力や助言、指導を得て大成したものである。心から感謝申し上げる次第である。

最後に、本書が多くの方々の貴重な研究資料として活用され、寄与することを願って序とする次第である。

昭和57年3月

仙台市教育委員会

教育長　藤井　黎

例　言

1. 本書は国庫補助事業の緊急遺跡範囲確認事業に伴う、仙台平野の遺跡群の発掘調査報告書である。
2. 本書の作成にあたり次のとおり分担した。

   本文執筆…加藤正範・金森安孝・主浜光朗・長島栄一

   遺構実測製図……金森安孝・長島栄一

   遺物実測製図……加藤正範・篠原信彦・金森安孝・主浜光朗・長島栄一

   遺構写真…金森安孝・長島栄一

   遺物写真…木村浩二・金森安孝

   編集……加藤正範・篠原信彦・金森安孝・主浜光朗・長島栄一
3. 本書中、郡山遺跡の調査報告は概報とし、詳細については仙台市文化財調査報告書「郡山遺跡Ⅱ－昭和56年度発掘調査概報」の中にまとめ、その遺構略号は次のとおりとした。

   ＳＢ　建物跡　　ＳＩ　竪穴住居跡

   ＳＤ　溝　跡　　ＳＫ　土　　壙
4. 本書中の土色については「新版標準土色帖」(小山、佐原：1973年）を使用した。
5. 地形図は建設省国土地理院発行の５万分の１「仙台」を使用した。
6. 本調査は、昭和56年８月に着手し、昭和57年３月31日に全ての事業を終了した。

目　　次

序　文
例　言

Ⅰ　調査計画と実績 …… 1

Ⅱ　発掘調査報告 …… 3
〔1〕　堤町窯跡B地点 …… 3
1．遺跡の位置と環境　2．調査経過　3．発見遺構　4．出土遺物　5．まとめ

〔2〕　史跡陸奥国分寺跡 …… 25
1．遺跡の位置と環境　2．調査経過　3．発見遺構　4．出土遺物　5．まとめ

〔3〕　上野遺跡 …… 27
1．遺跡の位置と環境　2．調査経過　3．発見遺構　4．出土遺物　5．まとめ

〔4〕　郡山遺跡 …… 39
1．遺跡の位置と環境　2．調査経過　3．発見遺構・出土遺物　4．まとめ

Ⅰ　調査計画と実績

仙台市内には、現在400ケ所以上が周知の埋蔵文化財包蔵地として遺跡登録されている。しかし、都市化の現象が活発化する中で、昭和56年度は発掘届が250件(昭和56年2月末現在）にも及び、これまで継承されてきた文化財が損失・煙滅の危機に面している。こうした文化財を最大限に保護・活用し継承していくためには、仙台市独自の保護行政だけでは限度が生じつつあるのが現状である。

そこで仙台市では今年度から国の補助を得て、仙台平野の遺跡群の発掘調査を行うこととし、下記のような実施計画を立てた。

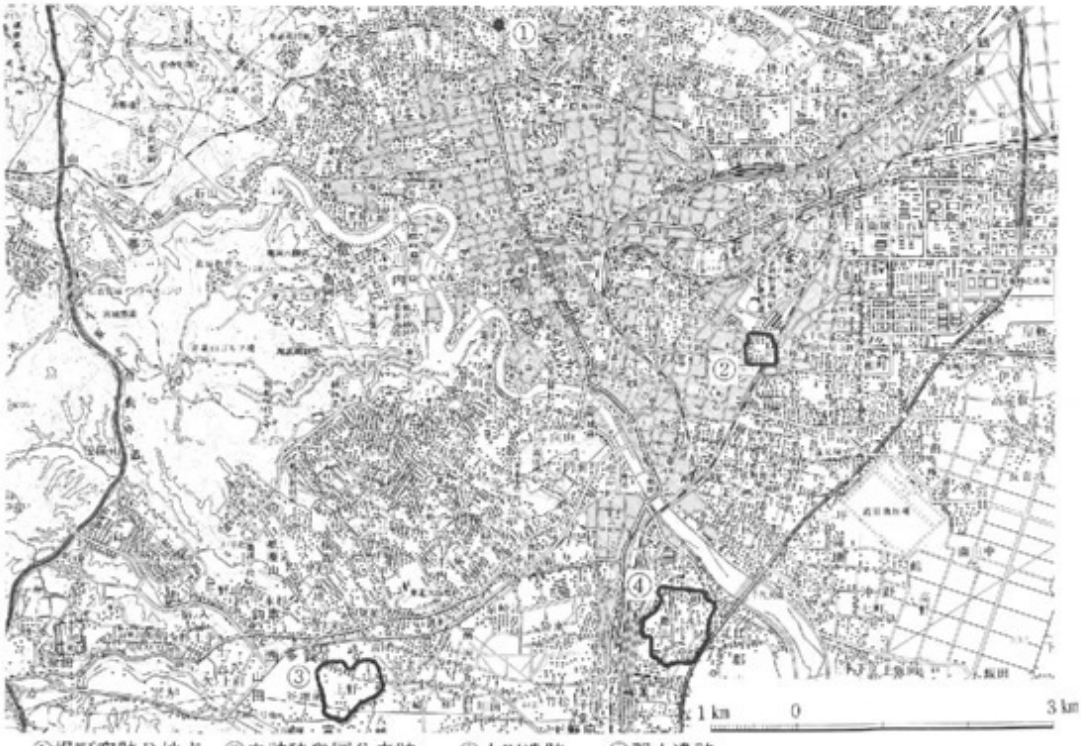
1．目　　的　仙台平野に分布する遺跡群にかかる個人の小規模な開発（個人住宅の建築等）に伴う発掘調査

2．調査面積　1,000～1,300㎡

3．調査期間　昭和56年8月～昭和56年12月

4．調査体制

調査主体　仙台市教育委員会



①堤門窯跡B地点　②史跡陸奥国分寺跡　③上野遺跡　④郡山遺跡

第1図　発掘調査遺跡位置図

調査担当　仙台市教育委員会社会教育課文化財調査係

（課長）永野昌一　（主幹兼係長）早坂春一　（教諭）加藤正範

（主事）金森安孝　長島栄一

同課文化財管理係

（係長）鈴木昭三郎　（主査）鈴木高文　（主事）山口　宏　渡辺洋一

調査指導　文化庁記念物課　河原純之　桑原滋郎　仙台育英学園高等学校教諭　渡辺泰伸

調査・整理参加者　足立昌弘　池田俊也　菅野政彦　菊地宣之　佐々田弥生　四竈広幸

末永澄子　鈴木　等　高橋　渡　藤本智彦　茂泉　満　山崎　哲

渡辺伸一

今年度の発掘調査は初年度に当たり、文化財保護行政指導と並行しながらの調査であったため、予定調査面積を大きく下回ったが、遺跡の範囲確認・性格把握・詳細分布調査という点で大きな成果を得ることができた。　（加藤正範）

表１表　発掘調査実績表

遺跡名＼事項	堤町窯跡B地点 (C－428)	史跡陸奥国分寺跡 (C－419)	上野遺跡 (C－208)	郡山遺跡 (C－201)			
				第19次発掘調査	第20次発掘調査	第21次発掘調査	第22次発掘調査
所在地	仙台市堤町二丁目114・74外	木ノ下三丁目2	富田字上野西16－1外	郡山三丁目10－13	郡山三丁目126－2	郡山三丁目11－7	郡山五丁目28－1
申請者住所	仙台市東勝山二丁目24-39	木ノ下三丁目10－10	富田字六軒町70	郡山三丁目20－13	郡山三丁目3－6	郡山三丁目1－28	郡山五丁目2－2
申請者氏名	上田孝繁他1名	柴田勝秀	後藤新治	山口　捷	鈴木　武	安斎健次	佐藤一雄
開発内容	宅地造成	住宅増改築	住宅新築（2棟）	住宅解体新築	飲食店新築	住宅解体新築	事務所兼住宅新築
対象面積	835㎡	33㎡	472㎡	73㎡	167㎡	237㎡	㎡
調査面積	60㎡	12㎡	12㎡	10㎡	10㎡	12㎡	8㎡
調査期間	昭和56年9月22日～10月22日	10月23日～24日	12月21日～25日	8月11日～20日	8月17日～20日	8月24日～25日	12月15日～19日

Ⅱ　発掘調査報告

〔1〕堤町窯跡Ｂ地点

1．遺跡の位置と環境

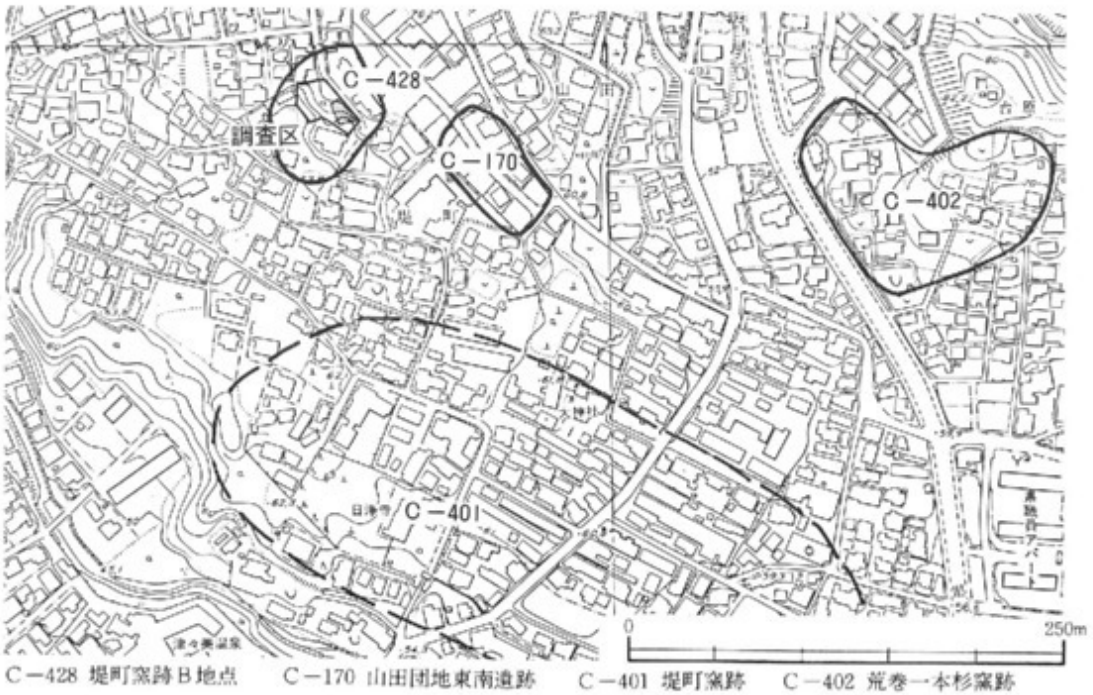
堤町窯跡Ｂ地点は、仙台市堤町を中心に所在する遺跡で、仙台駅の北東 3km、仙台市の北辺を画する丘陵の南側斜面に位置している。

この丘陵は奥羽山脈が太平洋側に伸びた七北田丘陵が、七北田川・広瀬川によって浸食された丘陵の東端にあたり、台ノ原段丘に属する。また、この丘陵には良好な粘土と水源が存在し、陸奥国分寺や多賀城に瓦を供給した台ノ原・小田原古窯跡群として、古くから知られている。

申請地は、堤町窯跡Ｂ地点として、宝相華文軒丸瓦や連珠文軒平瓦を多量に表面採取できるということで知られていた。しかし、地元住民の話によれば、調査区の北～東にかけて数基の窯跡が存在していたが、宅地造成工事によって破壊されたとのことである。

2．調査経過

申請地中央部から南側にかけて、地形が一部平坦になっており、ここを中心に約60㎡のトレンチを設定した。重機による表土排除後掘り下げを行い、黄橙色砂質シルト層の上面で土壙 3基、溝跡 5条、ピット14個を検出した。トレンチ南側には、焼土や炭を多く含む黒褐色シルト



第２図　発掘調査区位置図

層が広がっていたが、樹木があり掘り下げができなかったのでトレンチ南壁に沿って掘り下げたところ、溝跡2条をさらに検出した。

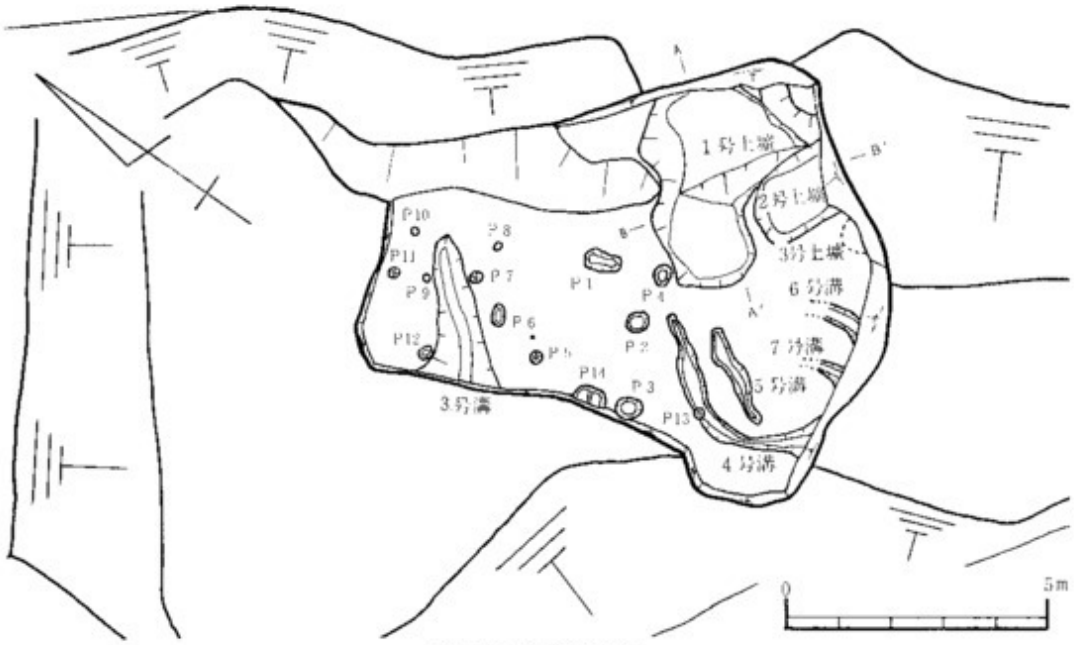
3．発見遺構

1号土壙　調査区東寄りで検出した。検出面での平面形は不整形で、大きさは290×370cm以上、深さは14～48cm程である。断面形は東西方向で舟底形、南北方向で逆台形を呈し、底面は東から西に傾斜している。堆積土は黄褐色・黒褐色の粘土質シルトで、炭・焼土を含み、11層に分けられ、堆積状況は秩序がみられない。出土遺物には、宝相華文軒丸瓦、連珠文軒平瓦、有段丸瓦、平瓦、各種文字瓦と、須恵器坏・甕・把手、風字硯、内面黒色処理のある土師器坏・高台付坏がある。2号土壙を切り、1号・2号溝に切られている。

2号土壙　調査区南辺で検出し、南側は調査区外に延びている。検出面での平面形は方形で、大きさは140×175cm以上、深さはトレンチ壁の観察によれば56～116cmを計る。断面形は逆台形で、堆積土は黄橙色・黄褐色のシルト質粘土ないし粘土で、上層に炭・焼土を含み、15層に分かれる。出土遺物には、宝相華文軒丸瓦、有段丸瓦、須恵器坏・甕、土師器坏がある。1号土壙に切られている。

3号土壙　調査区南辺Ⅵ層上面で検出したが、規模・平面形ともに不明である。瓦、須恵器坏・甕を出土する。

1号溝　調査区東辺から調査区中央部に延びる溝で、Ⅳ層上面で検出し、総長3.4m以上、検出面での上端幅12～30cm、底幅6～18cm、深さ8～12cm程、断面形は舟底形を呈す。堆積土は灰白色粘土の単層で、遺物は出土しない。1号土壙を切っている。



第3図　遺構配置図

2号溝　調査区南東端Ⅴ層上面で検出し、東西方向に延びる溝で、総長1.6m以上、検出面での上端幅約200cm、底幅12～76cm、深さ5～32cm程、断面形は緩やかな立ちあがりの逆台形を呈す。堆積土はにぶい黄褐色ないし灰白色の粘土で、瓦、須恵器坏を少量出土する。1号土壙を切っている。

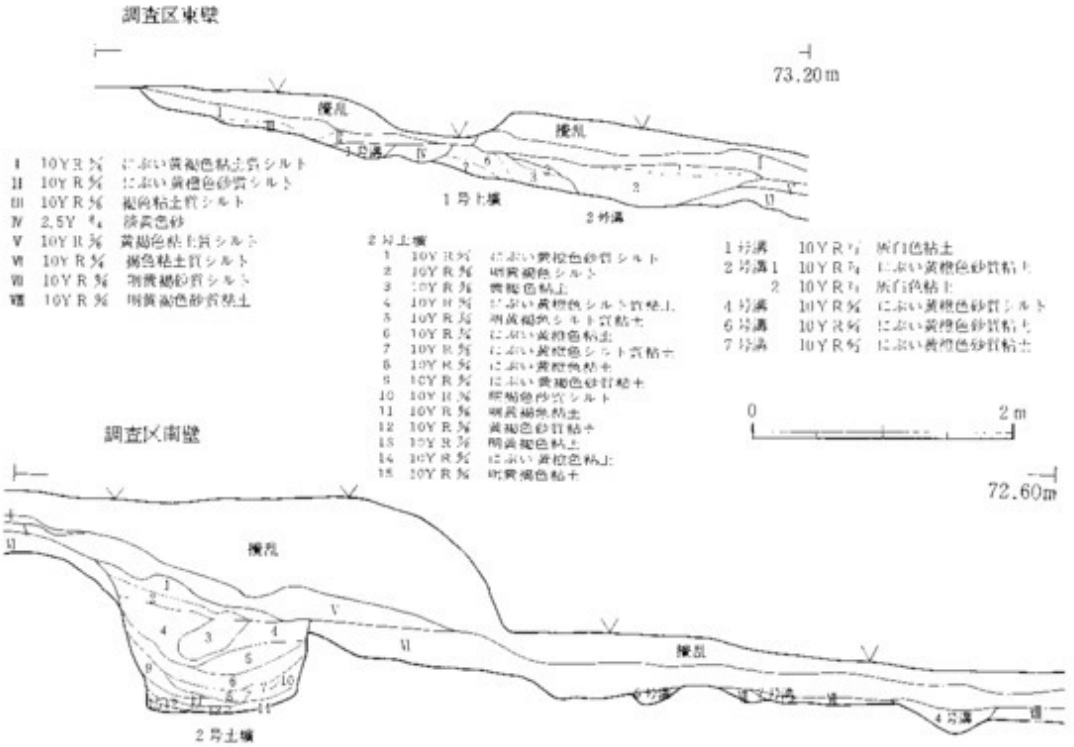
3号溝　調査区北側攪乱土直下で検出し、中央部から調査区外に東西方向に延びる溝で、総長2.8m以上、検出面での上端幅1.6m程度、底幅10～25cm、深さ8～52cm程で断面形はV字状を呈す。堆積土は黄橙色・褐色の粘土質シルトないし砂で、瓦、土師器坏・甕の破片を少量出土する。

4号溝　調査区中央から南に調査区外に延びる溝で、Ⅶ層ないしⅧ層上面で検出し、総長4.1m以上、検出面での上端幅15～50cm、底幅5～25cm、深さ7～16cm程で断面形は舟底形を呈す。堆積土はにぶい黄橙色の砂質シルトの単層で、瓦、須恵器坏・甕を少量出土する。

5号溝　4号溝に平行して南北方向に延びる溝でⅥ層上面で検出し、総長2m、検出面での上端幅15～40cm、底幅10～20cm、深さ6～18cm程で断面形は舟底形を呈す。堆積土は黒褐色シルトで、瓦、須恵器坏・甕を少量出土する。

6号溝　調査区南辺地山面で検出し、調査区外に南北方向に延びる溝で、総長75cm以上、検出面での上端幅30cm、底幅15cm、深さ12cm程で断面形は舟底形を呈す。堆積土はにぶい黄橙色砂質粘土の単層で、遺物を出土しない。

7号溝　6号溝に平行して、調査区外に南北方向に延びる溝で、Ⅶ層上面で検出し、総長75cm



第4図　調査区土層断面図

以上、検出面での上端幅15～40cm、底幅10～15cm、深さ5cm程で断面形は舟底形を呈す。堆積土は、にぶい黄橙色の砂質粘土の単層で、遺物は出土しない。

なお、6号・7号溝は、樹木があったために完掘できなかった。

ピット1　調査区中央で検出し、検出面での平面形は歪んだ楕円形で、大きさは35×70cm、深さは25cm、断面形は逆台形を呈す。瓦、須恵器坏・甕を出土する。

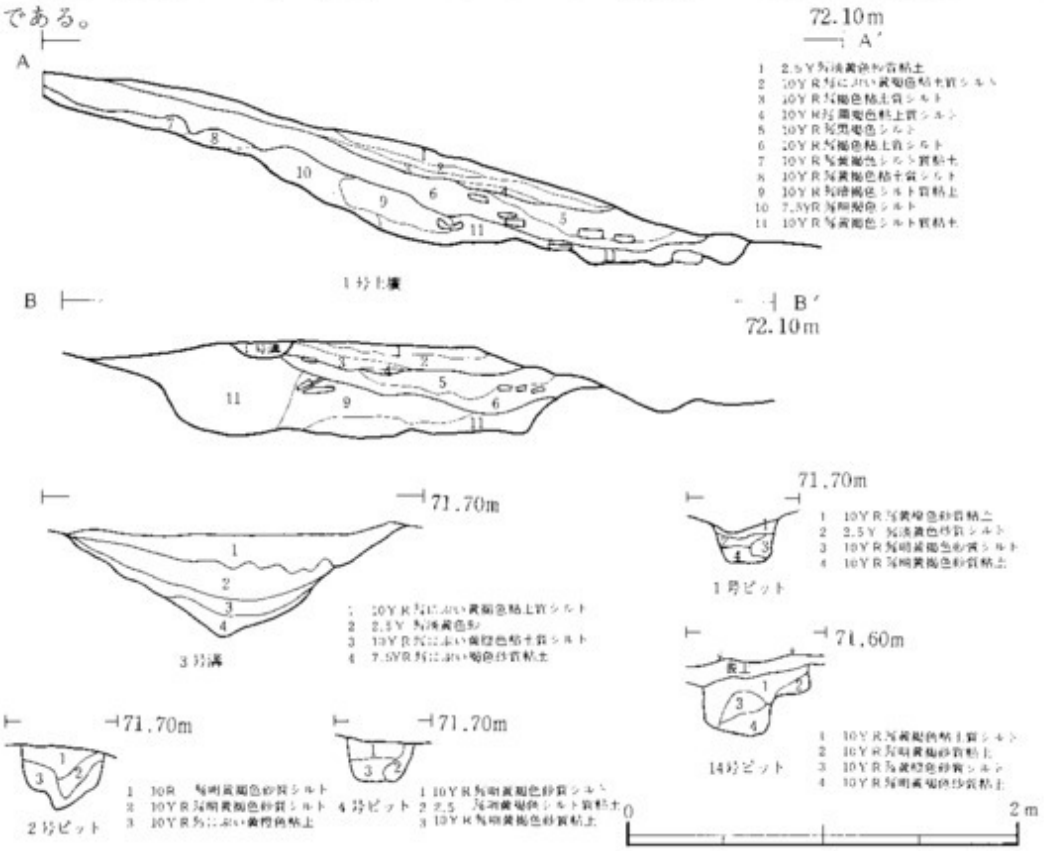
ピット2　調査区中央で検出し、検出面での平面形は円形で、大きさは35×45cm、深さは32cm、掘り方に段がついている。瓦　須恵器坏・甕を出土する。

ピット3　調査区西辺で検出し、検出面での平面形は楕円形で、大きさは35×50cm、深さは15cm、断面形は逆台形を呈す。須恵器坏・甕を出土する。

ピット13　調査区西寄りで検出し、検出面での平面形は円形で、大きさは直径20cm、深さは7cmである。4号溝を切っている。

ピット14　調査区西辺で検出し、検出面での平面形は隅丸方形で、大きさは40×65cm以上、深さは30cm、掘り方に段がついている。瓦、須恵器坏・甕を出土する。

その他のピットは、調査区北側、3号溝の周辺に分布しており、検出面での平面形は円形ないし楕円形で、大きさは10～45cm程である。ピット7から摩滅した土師器小破片を出土しただけである。



第5図　遺構土層断面図

4．出土遺物

出土遺物は、瓦、須恵器が主であり、全体の9割以上を占める。この他には硯、土師器が出土しているが少量である。出土遺物の全体量は遺物収納用平箱にして約17箱分である。

(1) 瓦

出土した瓦のうち、文様瓦は軒丸瓦7点、軒平瓦3点、計10点である。

宝相華文軒丸瓦は6点で、1号土壙6・11層、2号土壙4層、表土から出土している。1号土壙6層出土のものは瓦当面の¾破片である。11層出土のものは瓦当面の½破片であり、歪みが大きく、窯壁土が付着している。2号土壙出土のものは瓦当面がほとんど現存している。中央にやや大なる蓮子1個、一条の輪郭線の外側に4個の珠文を配する。主文様は側面からみた忍冬花状のものを8個並べたもので、外区に8個の珠文を有し、周縁は素文である。伊東信雄氏の分類（註1）によれば第1類に属し、平安期のものである。その他は瓦当面の小破片である（第8図1～3、図版3－1～3）。

第6図　1号土壙6層遺物出土状況図

御車文軒丸瓦1点が表土中から出土している。瓦当面の¼破片で中央部に円環をめぐらし、その周囲に3個の舌状の文様をあらわしており、素縁である（第8図4、図版3－6）。

連珠文軒平瓦は3点で、1号土壙3・6層、表土から出土している。1号土壙6層出土のものは、瓦当面は完形で、上下の縁の間の瓦当面に9個の珠文を並べており、珠文間と上下の縁の間に三角形の部分を残している。顎には縄目が施されており、篦描きで鋸歯文をあらわしている。伊東信雄氏の分類（註1）によれば第2類に属する。他の2点も小破片であるが第2類に属する（第8図5・6、図版3－4・5）。

玉縁を有する丸瓦を1号土壙7～8層、2号土壙、表土から6点出土している。1号土壙7～8層出土のものは、ほぼ完形で全長40cm、凹面は全面に布目がみられ、凸面は全面ヘラケズリしている（第10図1）。

文字瓦は11点出土している。刻印瓦は2点で、表土から「未」の凹面陰刻のある平瓦が出土している。篦書き瓦は5点あり、1号土壙6層から平瓦凹面に陰刻の「未」、「千」の2点が、表土から「大」1点と判読不能な1点が出土している。調査区近辺での表採資料に「子」1点がある。指書き瓦は4点あり、「田」と判読できる表採の1点以外は判読不能である。4点のうち1点は丸

瓦凹面に書かれており、他の３点は平瓦凹面に書かれている(第９図、図版４)。

出土した瓦は、そのほとんどが一枚造りと考えられる。

(2) 須恵器

須恵器では、坏、甕、把手を出土している。

〈坏〉　全てロクロ使用の平底のもので、器面調整は内外面にロクロナデを施している。底部の切り離し技法、調整によって次の３つのタイプに分類される。

Ⅰ類…底部切り離し技法は回転ヘラ切りで、その後、手持ちヘラケズリ調整を施しているもの。

Ⅱ類…底部切り離し技法が回転ヘラ切りで、無調整のもの。

Ⅲ類…底部切り離し技法が回転糸切りで、無調整のもの。

Ⅰ類　２号・３号土壙、２号・３号ピット、灰原、表土から出土しており、図化できたものは３点で、手持ちヘラケズリを施している。法量は、口径13.0cm程、底径7.7～8.2cm、器高3.9cm程で、底径／口径は0.59～0.63の比率を示し、比較的大きな底部を有する。底部破片の出土数は全体数の６％を占める（第12図7～9、図版６－６）。

Ⅱ類　1号・2号・3号土壙、2号・3号・14号ピット、灰原、表土から出土しており、図化できたものは5点で、法量は、口径12.2～16.2cm、底径6.4～8.4cm・器高3.7～5.1cmで、底径/口径は0.45～0.62といった比率を示し、比較的大きな底部を有する。底部破片の出土数は全体数の57％を占める（第12図2～6）。

Ⅲ類　１号・２号土壙灰原、表土から出土しており、図化できたものは１号土壙出土の16点で、底部に「＋」の箆書きのあるものが15点を数える。法量は口径13.2～15.0cm、底径5.0～6.6cm、器高3.4～4.4cm、底径／口径は0.39～0.46と比軽的小さい底部を有する。底部破片の出土数は全体数の37％を占める（第11図1～15、第12図１、図版５－１～10、図版６－１～５）。

〈甕〉　器形全体を復元実測できるものはないが、頸部から口縁部にかけての破片が６点あり、図化することができた（第12図10～15）。

10(１号土壙３層）は、肩部から口縁部にかけての破片で、「く」字状に外反し、端部は上下に短くのび、端部上端は稜を形成し、その内側は受口状になる。内外面ともロクロナデを施し、色調は灰色ないし灰黄色で、頸部内面に黄灰色の自然釉がみられる。口径は推定で24.9cmである。

第２表　須恵器坏底部破片集計表

（　）内は図化した点数を示す

分類＼遺構	1号土壙 1層	1号土壙 3層	1号土壙 6層	1号土壙 7層	1号土壙 7～8層	2号土壙	3号土壙	2号ピット	3号ピット	14号ピット	灰原	表土	計
Ⅰ						2(2)	1	1(1)	1		2	1	8 (3)
Ⅱ	3	6	8(1)	8	10	13(3)	7	3(1)	7	1	5	3	73 (5)
Ⅲ		27(13)	5	9(3)	1		1				3	1	47 (16)
計	3	33(13)	13(11)	17(3)	11	14(5)	9	4(2)	8	1	10	5	128 (24)

第3表　須恵器坏観察表

No.	出土遺構—層位	分類	法量(cm) 口径	底径	器高	底径/口径	色調 内面	外面	底部 切り離し技法	調整	「へ」ヘラ書き	器面調整	備考	図番号	写真番号
1	1号土壙3層	Ⅲ	14.5	6.6	4.0	0.46	灰白	灰白	回転糸切り	ナシ	アリ	内外面ロクロナデ	ゆがみあり	第11図1	図版5−1
2	1号土壙3層	Ⅲ	14.3	6.6	4.0	0.46	灰白	灰白	回転糸切り	ナシ	アリ	内外面ロクロナデ		2	5−2
3	1号土壙3層	Ⅲ	13.8	6.0	4.2	0.43	灰白	灰白	回転糸切り	ナシ	アリ	内外面ロクロナデ		3	5−3
4	1号土壙3層	Ⅲ	14.0	6.0	4.2	0.42	灰白	灰	回転糸切り	ナシ	アリ	内外面ロクロナデ		4	5−4
5	1号土壙3層	Ⅲ	13.9	6.3	4.0	0.45	灰白	灰	回転糸切り	ナシ	アリ	内外面ロクロナデ		5	5−5
6	1号土壙3層	Ⅲ	13.8	5.4	4.3	0.39	灰	オリーブ灰	回転糸切り	ナシ	アリ	内外面ロクロナデ		6	5−6
7	1号土壙3層	Ⅲ	13.8	5.5	4.0	0.40	灰	灰	回転糸切り	ナシ	アリ	内外面ロクロナデ		7	5−7
8	1号土壙3層	Ⅲ	13.8	6.0	4.2	0.43	灰白	灰白	回転糸切り	ナシ	アリ	内外面ロクロナデ		8	5−8
9	1号土壙3層	Ⅲ	13.6	5.0	4.0	0.37	灰	灰	回転糸切り	ナシ	アリ	内外面ロクロナデ	ゆがみあり	9	5−9
10	1号土壙3層	Ⅲ	13.5	5.4	4.0	0.40	灰白	灰白	回転糸切り	ナシ	アリ	内外面ロクロナデ		10	5−10
11	1号土壙3層	Ⅲ	13.2	6.0	4.0	0.45	灰白	灰白	回転糸切り	ナシ	アリ	内外面ロクロナデ		11	6−1
12	1号土壙3層	Ⅲ	13.2	5.8	3.4	0.44	暗オリーブ灰	オリーブ灰	回転糸切り	ナシ	アリ	内外面ロクロナデ		12	ナシ
13	1号土壙7層	Ⅲ	15.0	6.0	4.2	0.40	灰白	灰白	回転糸切り	ナシ	アリ	内外面ロクロナデ		13	6−2
14	1号土壙7層	Ⅲ	13.6	5.6	3.9	0.41	灰	灰	回転糸切り	ナシ	アリ	内外面ロクロナデ		14	6−3
15	1号土壙7層	Ⅲ	13.5	5.6	4.4	0.41	灰白	灰白	回転糸切り	ナシ	アリ	内外面ロクロナデ		15	6−4
16	1号土壙3層	Ⅲ	14.4	5.9	4.0	0.41	灰白	灰白	回転糸切り	ナシ	ナシ	内外面ロクロナデ		第12図1	6−5
17	1号土壙6層	Ⅱ	16.2	8.4	5.1	0.52	灰白	灰白	回転へラ切り	ナシ	ナシ	内外面ロクロナデ		2	ナシ
18	3号土壙	Ⅱ	12.2	7.6	4.6	0.62	青灰	灰	回転へラ切り	ナシ	ナシ	内外面ロクロナデ		3	ナシ
19	3号土壙	Ⅱ	14.2	6.4	3.7	0.45	浅黄橙	浅黄橙	回転へラ切り	ナシ	ナシ	内外面ロクロナデ		4	ナシ
20	3号土壙	Ⅱ	不明	6.8	不明	不明	青灰	青灰	回転へラ切り	ナシ	ナシ	内外面ロクロナデ		5	ナシ
21	2号ピット1層	Ⅱ	14.2	不明	4.2	不明	灰	灰	回転へラ切り	ナシ	ナシ	内外面ロクロナデ		6	ナシ
22	3号土壙	Ⅰ	13.0	7.7	3.9	0.59	灰	灰	回転へラ切り	手持ちヘラケズリ	ナシ	内外面ロクロナデ		7	6−6
23	2号ピット1層	Ⅰ	不明	7.8	不明	不明	灰	灰	回転へラ切り	手持ちヘラケズリ	ナシ	内外面ロクロナデ		8	ナシ
24	3号土壙	Ⅰ	不明	8.2	不明	不明	灰	灰	回転へラ切り	手持ちヘラケズリ	ナシ	内外面ロクロナデ		9	ナシ

11（1号土壙7層）は，肩部から口縁部にかけての破片で、口縁部にかけて直立ぎみに外反し、端部は下方にのび、上端は稜をなす。内外面ともロクロナデ、頸部内面に一部縦方向のナデを施し、褐灰色の自然釉がみられる。口径は18.6cmである。

12（1号土壙6層）は、頸部から口縁部にかけての破片で、口縁部が短く外反し、端部は直立ぎみにのびている。外面に一部叩き目がみられ、内外面ともロクロナデを施している。色調は浅黄橙色で、口径は24．8cmである。

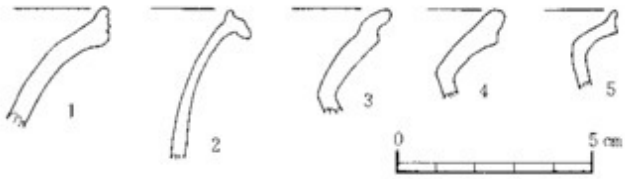
13（1号土壙7～8層）は、頸部から口縁部にかけての破片で、口縁部は外反し、端部は上方に直立し、その内側は受口状になる。内外両面に褐灰色ないし黒褐色の自然釉がみられ、口径は推定で22.4cmである。

14（3号土壙）は、頸部から口縁部にかけての破片で、口径33cm程の大型甕であろう。口縁部にかけて直立ぎみに外反し、端部は上下に短くのび、断面三角形を呈し、上端内側は受口状になる。一部に叩き目がみられ、内外面ロクロナデの後、頸部に3条の粗い櫛描き波状文2段を施す。色調は灰色で、外面に暗緑灰色の自然釉がみられる。

15（1号土壙6層）は、体部から口縁部にかけての破片で、口縁部にかけてほぼ直立し、折りかえし口縁となり、幅3.1cmの口縁帯を形成するもので、中央が凹状を呈する。口縁帯の下には叩き目があり、ロクロナデを施している。色調は淡黄色で、口径は推定で24.8cmである。

これらの他に、口縁部から頸部にかけての小破片が5点あり、破片実側をした（第7図）。

1（表上）は口縁部が外反し、端部は上方に短くのび、上端に稜を形成し、その内側は受口状を呈す。端部外面には3条の沈線をめぐらす。内外面ロクロナデで、色調は灰色ないし褐灰色を呈す。



第7図　須恵器甕口縁部断面実測図

2（3号土壙）は、器厚が薄く、端部は上下に短くのび、上端は稜をなしその内側は受口状を呈す。一部に叩き目がみられ、内外面ロクロナデを施している。色調は灰色で、内面に自然釉がみられる。

3（1号土壙6層）は、口縁部が短く外反し、端部は上方にわずかにのびた後、さらに横方向にのび、端部外面は凹状を呈す。叩き目がみられ、その後ロクロナデを施している。色調は浅黄橙色を呈す。

4（1号土壙3層）は、口縁部の器厚が頸部より厚く、短く外反し、端部外側やや下に断面三角形の凸帯をもつ。外面に叩き目が一部みられ、内外面にロクロナデを施している。色調は浅黄橙色を呈す。

5（1号土壙6層）は、口縁部がごく短く外反し、端部はわずかに上方にのび、鋭い稜をなし、その内面は受口状を呈す。ロクロナデを施しており、色調は浅黄橙色を呈す。

〈把手〉　1号土壙7～8層から1点出土している。接合面から剥離しており、全体の器形は不明である。ヘラケズリ調整した後、指頭またはヘラで体部に貼り付けている。色調は浅黄橙色を呈す（図版6－9）。

(3)　硯

〈風字硯〉　1号土壙6層から1点出土している。現存長は7.2×8.9cmで、周縁部は平坦で、縁の内面上部から裏面全体にはヘラケズリを、内面から海にかけてはナデを施している。陸の部分は欠損している。外面には、色調が灰色と黒褐色の部分とがあり、伏焼した際に重ね焼きしたものと思われる。墨痕は認められない（第10図3、図版6－10）。

(4)　土師器

土師器の出土量は、出土遺物の全体量に比して極めて少なく、坏や甕の小破片がわずかにあるのみである。

〈坏〉　1号土壙3層から、底部から体部下端にかけての破片を出土した。平底で、底部から口縁部にかけてやや内彎ぎみに立ちあがり、底部外面には回転糸切り痕を残す。底部切り離しの後、底部から体部下端にかけてヘラケズリが施されている。内面はヘラミガキ、黒色処理している。体部外面の色調は黄橙色で、底径6.3cmである。

1号土壙3層から、高台付坏の坏底部から高台にかけての破片2点を出土している。高台部

は高く（1.1cm）、高台径6.8cm（推定）程で、摩滅しているために調整は不明である。

これらの他には、全て小破片のため、器形の推定できるものはなかった。

5．まとめ

(1) 遺構について

1号土壙は、その平面形・堆積状況・底部の形状から、傾斜状の地形を利用し、斜面上部に存在した窯の焼成不良品等を廃棄した捨て場と考えられる。

2号土壙は、プラン全体を完掘することはできなかったが、土壙底面付近に黄褐色系粘土が検出され、粘土溜めの機能をもっていた可能性もあるが、詳細は不明である。

3号土壙は、検出面であるⅥ層と堆積土が類似していたために、規模・平面形とも不明であるが、出土遺物から古代の遺構と考えられる。

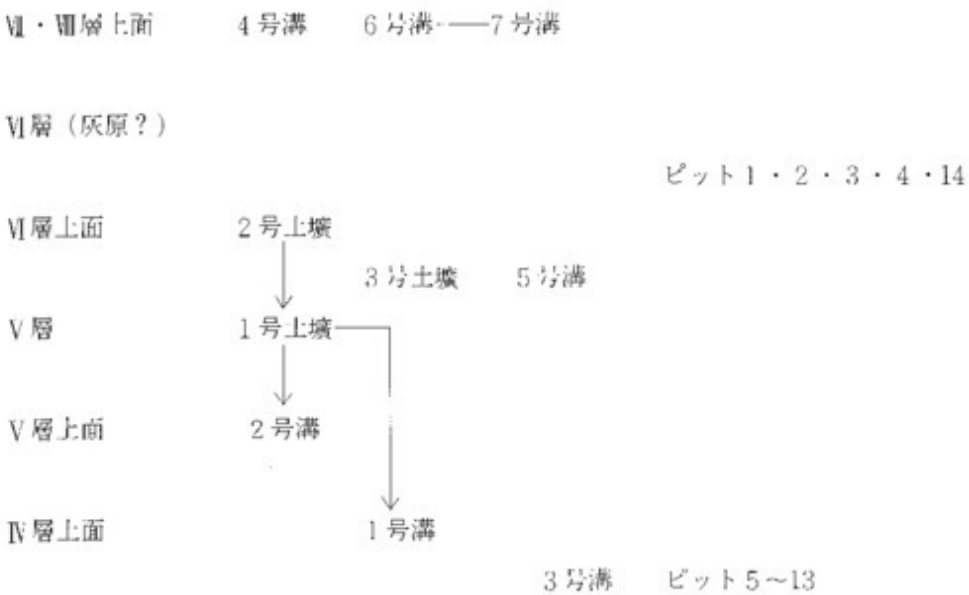
2号溝は、古代に属する溝と考えられるが、削平のために規模・性格等は不明である。

3号溝は、検出面が撹乱土の直下であり、削平も著しく、規模・性格等は不明である。

1号・4号・5号・6号・7号の各溝は、削平のために遺存状態が悪く、その性格等については不明であるが、人為的な遺構とは考えがたい。

ピットについては、1号・2号・3号・4号・14号ピットは、遺物出土状況・堆積土の状況より古代に属するものと考えられるが、その他のピットについては時代は明らかでない。各ピットの関連についても不明である。

以上のことから、これらの遺構の変遷を模式化すると次のようになる。



(2) 出土遺物について

〈瓦〉　今回の調査で出土した瓦は、そのほとんど全てが一枚造りであり、軒瓦には宝相華文・歯車文の軒丸瓦と連珠文軒平瓦がある。これらは、9世紀後半から10世紀にかけての多賀城第Ⅳ期（註2）、もしくは陸奥国分寺出土の平安時代に属する瓦（註1）に比定できる。近辺の窯跡との比較では、9世紀後半とされる安養寺中囲窯跡（註3）、五本松窯跡（註4）とほぼ同時期のものと考えられる。

〈須恵器〉　出土した坏は、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類と分類され、Ⅰ類は、岡田茂弘・桑原滋郎氏の分類（註5）でいう第2類bと、Ⅱ類は第6類bと、Ⅲ類は第9類aと同じ特徴をもつ。Ⅰ類は8世紀初頭から前半にかけて、Ⅱ類は8世紀末頃から9世紀後半にかけて、Ⅲ類は9世紀中葉から10世紀中葉にかけて存続しており、Ⅰ類の出土数が坏底部破片の出土総数の6％と少なく、このことを除外して考えれば（註6）、年代的には9世紀後半とみて大過ないものと思われる。

Ⅲ類の坏は、図化できた16点のうち1点を除けば、全て底部に「十」の「窯印」と考えられる篦記号があり、ほぼ同一の器形を呈し、3号土壙から出土した1点を除けば、全て1号土壙から出土している。

坏以外の器種には、甕と把手があるが、復元不能で全体の器形は不明である。

〈硯〉　風字硯が1号土壙から出土している。台ノ原・小田原古窯跡群では、風字硯を五本松窯跡、与平衛沼窯跡、安養寺中囲窯跡から、円面硯を五本松窯跡、神明社窯跡から出土しており、官窯跡に特有の遺物であろう。

〈土師器〉　土師器の出土量はわずかで、その中で器形の推定できるものは1号土壙出土の1点のみである。

坏は、ロクロを使用し、回転糸切り底で、切り離しの後、底部から体部下端にかけてヘラケズリを施し、内面ヘラミガキ、黒色処理されており、表杉ノ入式に相当し（註7）、9世紀後半以降に属する。

以上のことから、堤町窯跡B地点は、

1．台ノ原・小田原古窯跡群と同じく、古代陸奥国の官窯跡（宅地造成のために消失）に付属する遺構と考えられる。

2　出土遺物からみて、多賀城第Ⅳ期、もしくは陸奥国分寺の平安期の建て替え期、すなわち9世紀後半にあたり、安養寺中囲窯跡、五本松窯跡とほぼ同時期に比定される。（金森 安孝）

註1　伊東信雄　『陸奥国分寺跡』陸奥国分寺跡発掘調査委員会編　昭和36年

註2　宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡―昭和44年度発掘調査概報』昭和45年,『多賀城跡―昭和48年度発掘調査概報』昭和49年

註3　東北学院大学考古学研究部『安養寺中囲瓦窯址発掘調査報告書』昭和41年

註4　仙台市教育委員会『仙台市荒巻五本松窯跡発掘調査報告書』昭和48年

註5　岡田茂弘・桑原滋郎「多賀城周辺における古代杯形土器の変遷」『研究紀要Ⅰ』宮城県多賀城跡調査研究所　昭和49年

註6　底部切り離し技法が回転ヘラ切りで、その後手持ちヘラケズリ調整を施した須恵器坏については、年代決定に疑問が残るために論述することをさけた。

註7　氏家和典「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史第14輯』昭和32年
「陸奥国分寺跡出土の丸底坏をめぐって－奈良・平安期土師器の諸問題－」『柏倉亮吉教授還暦記念論文集　山形県の考古と歴史』山教史学会編　昭和42年

参考文献

石田茂作監修、原田芳雄編『東北古瓦図録』昭和49年

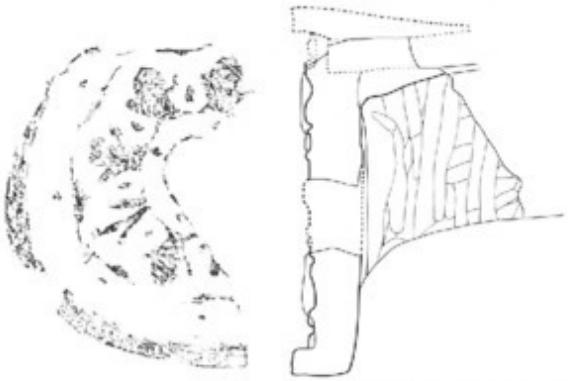
平安学園考古学クラブ『陶邑古窯址群Ⅰ』昭和41年

伊東信雄「仙台市内の古代遺跡」『仙台市史』第3巻　昭和25年

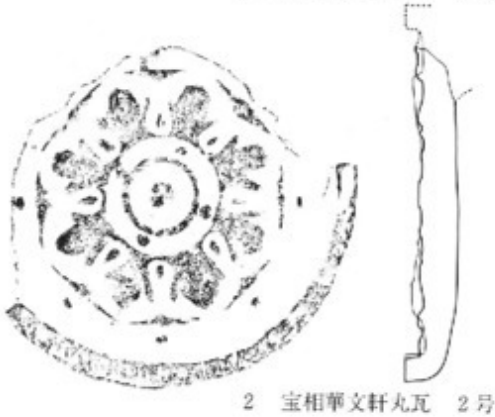
古窯跡研究会『陸奥国官窯跡群』昭和48年

『陸奥国官窯跡群Ⅱ』昭和51年

進藤秋輝・高野芳宏・渡辺仲行「多賀城創建瓦の製作技法」『研究紀要Ⅱ』宮城県多賀城跡調査研究所　昭和50年

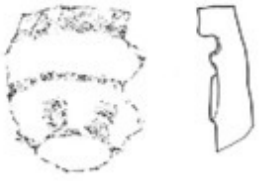


1　宝相華文軒丸瓦　1号土壙6層

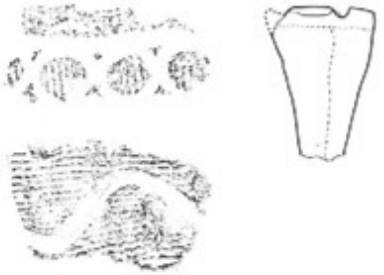


2　宝相華文軒丸瓦　2号土壙4層

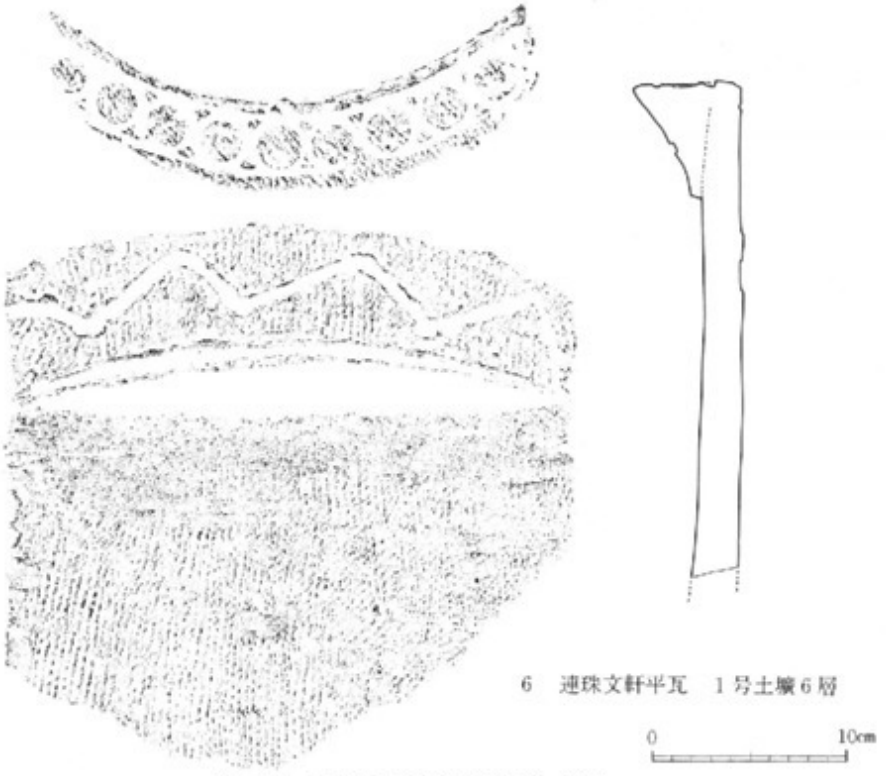
3　宝相華文軒丸瓦　1号土壙11層



4　歯車文軒丸瓦　表採



5　連珠文軒平瓦　表採



6　連珠文軒平瓦　1号土壙6層

0　10cm

第8図　軒丸瓦・軒平瓦実側図・拓影

1「未」 表採

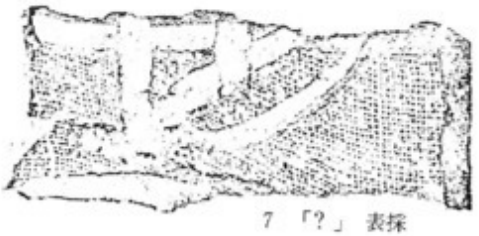
2「未」 表採

3「未」 1号土壙6層

4 「?」 表採

5 「大」 表土

6 「千」 1号土壙6層



7 「?」 表採

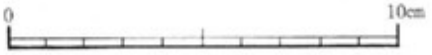
8 「?」 表採

9 「田」 表採

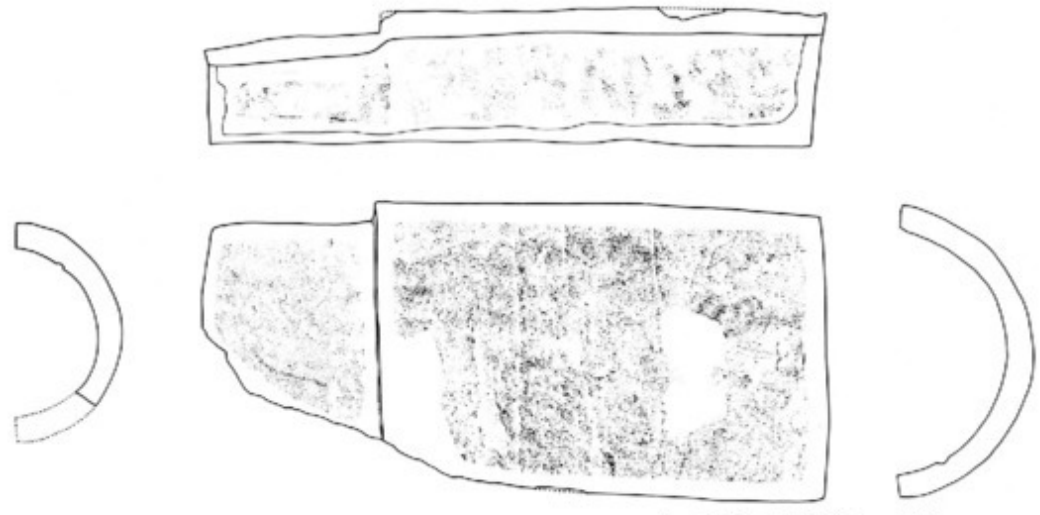
10 「?」 1号土壙

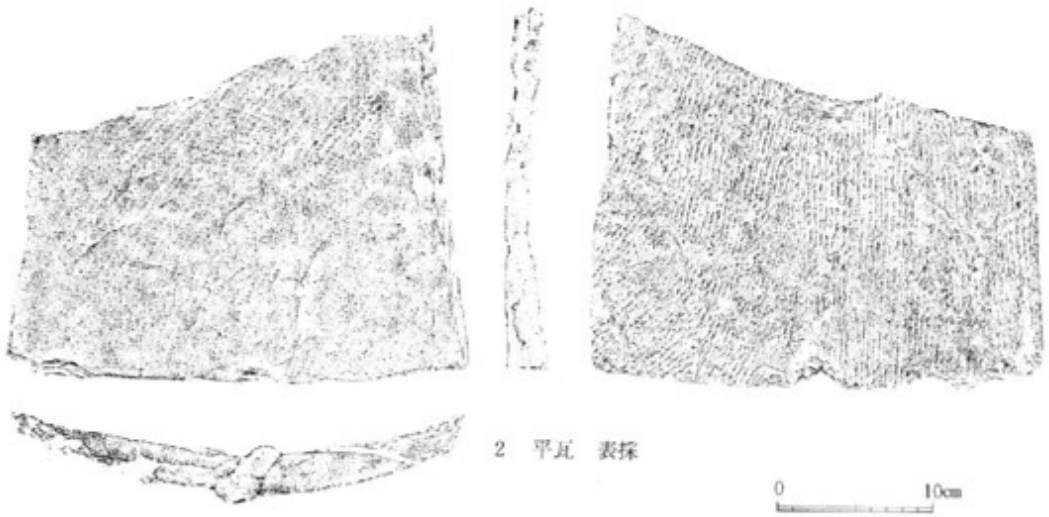
11 「?」 1号土壙

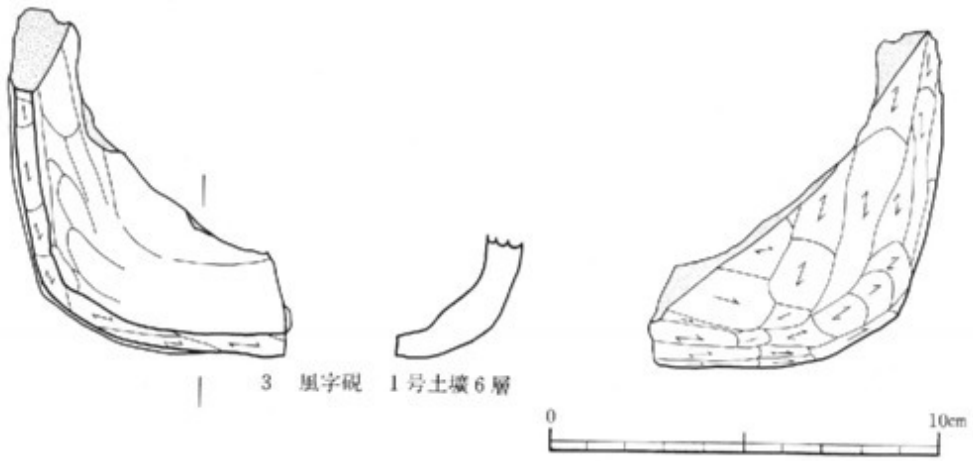
12 「子」 表採



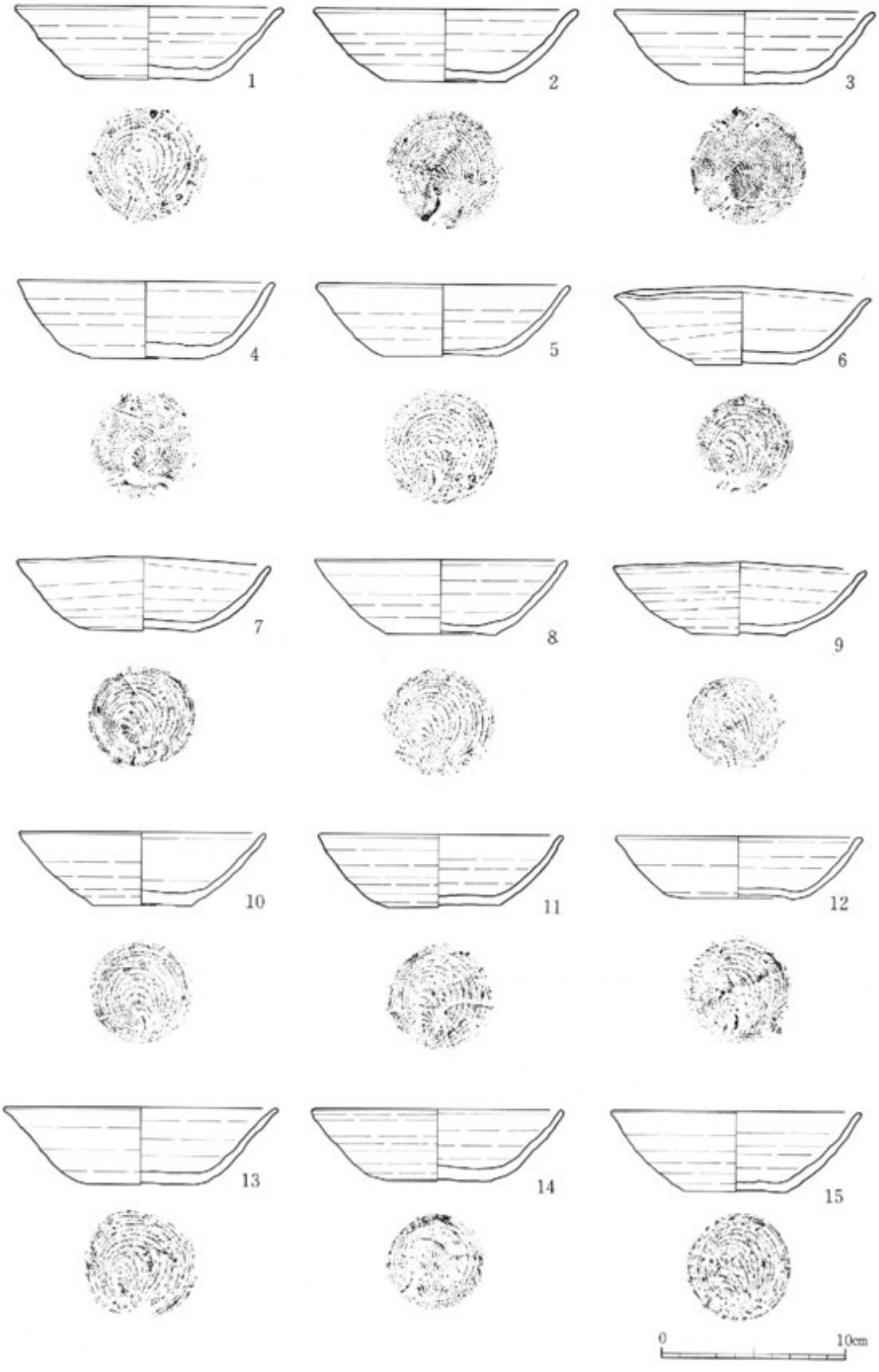
第9図 文字瓦拓影



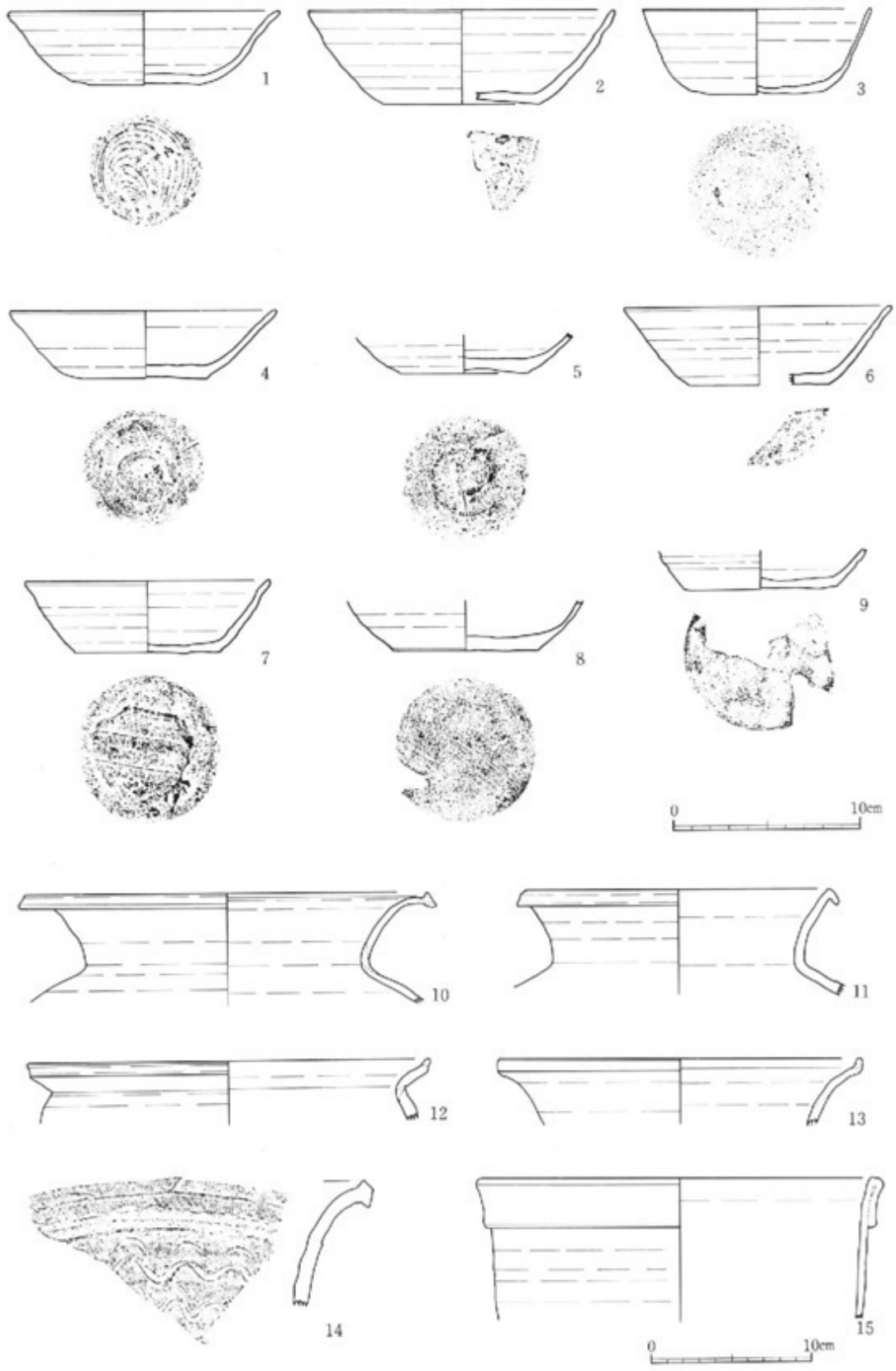




第10図　丸瓦・平瓦・風字硯実測図・拓影



第11図　須恵器坏実測図



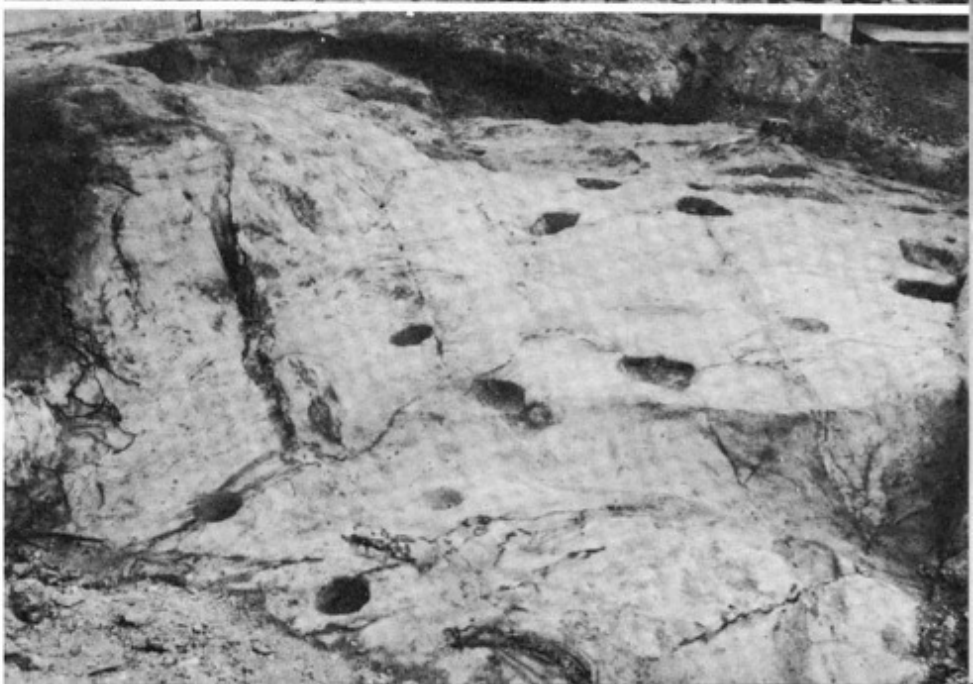
第12図　須恵器坏・甕実測図

図版1

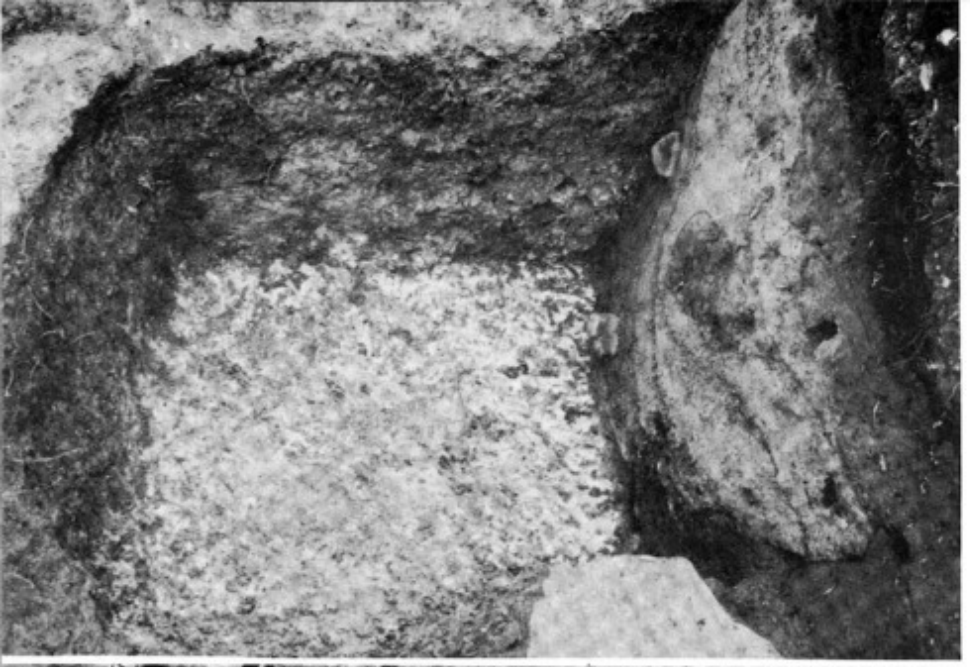
1．調査区全景
（西より）

2．調査区全景
（南より）

3．調査区全景
（北より）



図版2



1．2号土壙全景
（西より）

2．1号土壙6層
遺物出土状況
（南より）

3．1号土壙6層
連珠文軒平瓦出土状況

1

2

3

4 b

5

6

4

4 a

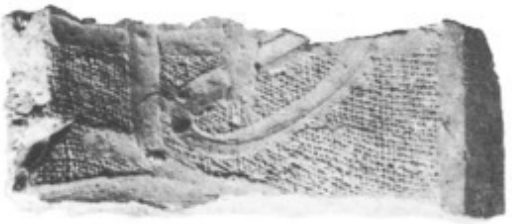
図版３　出土軒瓦

1	宝相華文軒丸瓦	１号土壙６層	4	連珠文軒平瓦	１号土壙６層
2	宝相華文軒丸瓦	２号土壙１層	5	連珠文軒平瓦	表採
3	宝相華文軒丸瓦	１号土壙11層	6	尚車文軒丸瓦	表採

1

5

2



6

3

7

4

8

図版4　出土文字瓦

1　刻印瓦「未」　表採
2　刻印瓦「未」　表採
3　施書き瓦「未」　1号土壙6層
4　施書き瓦「千」　1号土壙6層
5　施書き瓦「大」　表土
6　施書き瓦「？」　表採
7　指書き瓦「田」　表採
8　施書き瓦「千」　表採

1

6

2

7

3

8

4

9

5

10

1　須恵器坏　1号土壙3層
2　須恵器坏　1号土壙3層
3　須恵器坏　1号土壙3層
4　須恵器坏　1号土壙3層
5　須恵器坏　1号土壙3層
6　須恵器坏　1号土壙3層
7　須恵器坏　1号土壙3層
8　須恵器坏　1号土壙3層
9　須恵器坏　1号土壙3層
10　須恵器坏　1号土壙3層

図版5　出土須恵器坏

1

2

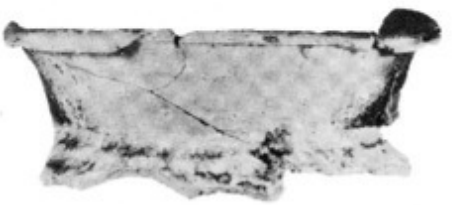
3

4

5

6

7


8

9

10

図版６　出土須恵器坏・甕・把手・風字硯

1	須恵器坏	1号土壙3層	6	須恵器坏	3号土壙
2	須恵器坏	1号土壙3層	7	須恵器甕	表採
3	須恵器坏	1号土壙3層	8	須恵器甕	1号土壙7層
4	須恵器坏	1号土壙3層	9	須恵器把手	1号土壙7～8層
5	須恵器坏	1号土壙3層	10	風字硯	1号土壙6層

〔2〕史跡陸奥国分寺跡

1．遺跡の位置と環境

史跡陸奥国分寺跡は仙台駅の南東約2.5km、国府多賀城跡から南へ10km離れた、仙台市木ノ下にある。ここは広瀬川によって形成された河岸段丘最下段である下町段丘に当たり、標高16～17m である。

周辺には、古墳時代中期の遠見塚古墳、後期の法領塚古墳、弥生時代以降の集落跡である南小泉遺跡、仙台市東郊条里跡などの遺跡があり、北の丘陵地帯には陸奥国分寺や国府多賀城に瓦を供給した台ノ原・小田原古窯跡群が広がっている。また、周辺一帯は、歌枕で著名な「宮城野」の地であり、十数年前までは田畑が広く残されていたが、市街化が進むにつれ住宅が密集してきている。

第13図　発掘調査区位置図

2．調査経過

史跡陸奥国分寺跡は、大正11年の史跡指定以来、数次にわたり調査が行われ、調査成果に基づいた環境整備が計画的になされてきている。

昭和55年度には東門跡付近の遺構確認調査が行われ、東門基壇および南北に延びる築地の存在が確認され、また、南北方向の外囲溝、東門基壇を切る掘立柱建物跡が検出されている。

申請地は55年度調査区の南側に位置しており、東門跡に関連する遺構の存在が予想された。

3．発見遺構

地表から60～120cmの深さまで撹乱が及び、黄褐色ローム地山層まで達している。調査区中央部に直径90cmのコンクリート枠の井戸跡があり、構築の際の掘削による現世の撹乱と考えられ、遺構は検出されなかった。

4．出土遺物

撹乱土層から平箱2箱の瓦が出土した。文様瓦では、連珠文軒平瓦の瓦当面から顎にかけての破片が1点ある。瓦当面には3個の珠文が残存し、珠文と縁の間に三角形の部分を残しているが、上縁は瓦当面の上端角にあたり、欠損して不明である。顎には縄目が施され、篦描きで一重の鋸歯文をあらわしている。焼成は堅く、色調は灰色で、胎土には小石・砂粒を含む（第14図）。伊東信雄氏の分類（註1）によれば、第二類に属するもので、55年度の調査（註2）でも4点出土している。

第14図　軒平瓦拓影

5．まとめ

今回の調査では、何ら古代の遺構を検出できなかったが、推定寺域線の外側、東門跡の近辺には遺構の存在が推測され、今後の調査をまちたい。

（金森安孝）

註1　伊東信雄「陸奥国分寺跡」陸奥国分寺跡発掘調査委員会編　昭和36年

註2　仙台市教育委員会「史跡陸奥国分寺跡-昭和55年度環境整備予備調査概報-東門跡」昭和56年

〔3〕上野遺跡

1．遺跡の位置と環境

上野遺跡は、仙台駅の南西約6km、富田付近の標高30m 前後の段丘上に位置しており、周辺の水田より4～8m 高く、推定総面積30haにも達する大遺跡で、以前から土器や石器を大量に出土することが知られていた（註1）。遺跡の西方の台地上には山田上ノ台・北前遺跡（旧石器～縄文時代の集落跡）、北方の丘陵上には三神峯遺跡（旧石器？～縄文時代）、東方の沖積地の自然堤防上には六反田・山口遺跡（縄文時代）が分布している。

2．調査経過

調査地点は、畑地として利用されており、耕作による撹乱が著しく、地表面に散布する遺物量も多い所である。東西2.5m ×南西4.5m の調査区を設定し、掘り下げたところ、地表下60cmの調査区北側で黒褐色ないし暗褐色シルトの遺物包含層を検出したが、耕作のため遺存状況は悪く、さらに下層まで撹乱が及んでおり、褐色ローム層上面で遺構を検出した。

3．発見遺構

発見した遺構は、土壙1基、ピット19個である。

1号土壙　褐色ローム面で検出された。西半部が調査区外になるため平面形は確認できなかっ

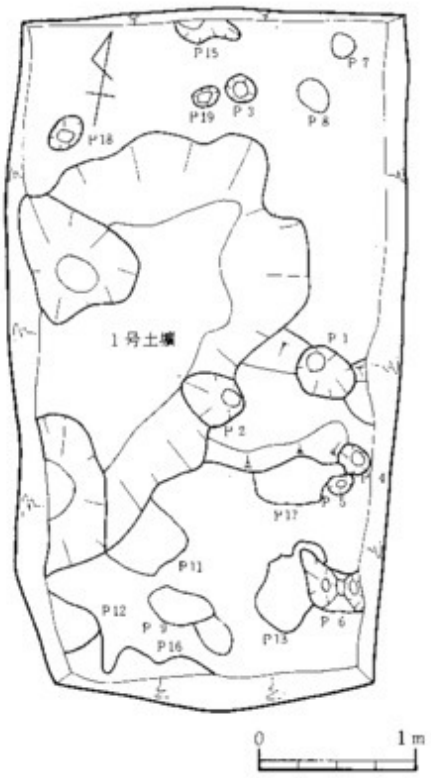
第15図　発掘調査区位置図

たが、2×2m以上の不整楕円形を基調としている。深さは40cm程であるが、底面は平坦でなく不明瞭である。

堆積土は、3層に大別される。第1層は、黒褐・暗褐色シルト層であり、西側に厚く堆積している。第2層は褐色の砂質及び粘土質シルト層で、しまりはなく、土壙中央部に堆積しており、確認面から底面まで厚く堆積している。また、第2層の堆積土の下に第1層の堆積土が入り込んでいることが認められた。第3層は黒褐色シルト層で明褐色の粘土質シルト及び焼土・炭化物を含んでいる。

遺物は各層から縄文土器、石器が出土しているが、層毎にまとまった出土状況を示さず、型式的にもまとまりは見られなかった。

以上の平面形、底面、堆積土、遺物出土状況から、1号土壙は、何らかの攪乱によって形成されたものであると考えられる。



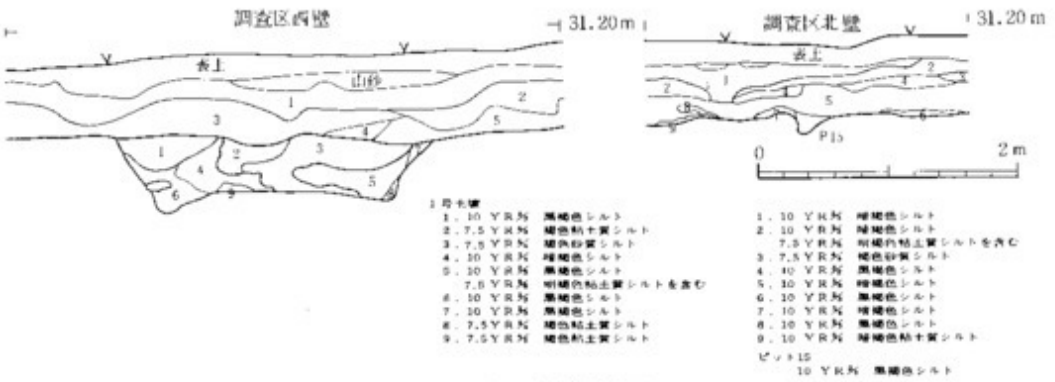
第16図　調査区平面図

ピット　ピットは19個検出されているが、ピット15以外は全て褐色ローム面で検出された。調査したのは10個であるが、全てシルト質の堆積土であり、柱痕は確認されなかった。また、ピットの組合せ関係も不明である。

ピット1・3から縄文土器が出土しているが、小破片である。

4．出土遺物

〈土器〉　表土・遺物包含層・1号土壙・ピットから出土した土器は全て縄文土器で、小破片が多く摩滅が著しいため、全体の器形・文様構成を復元できるものはなかった。文様が判別され、部位が判明したものは、1号土壙から出土した70点とピットから出土した3点である。



第17図　調査区土層断面図

これらの土器片は、文様の特徴から３類に分類される。

第Ⅰ類　第18図8・9、第19図7・8・14・17・18・22・23第20図1～4・13・14・18・19・、第21図5・6・8の土器で口縁部形態・体部文様・施文方法などから、南方町長者原貝塚第１群土器(註２)、同町青島貝塚第７類土器（註３）と類以しており、大木８ａ式土器であると考えられる。

第Ⅱ類　第18図1～4・10～23、第19図1～4・6・9・13・15・16・19・20、第20図5・7～10・12・15～17、第21図1～3・7の土器で、文様形態・施文方法などから、南方町青島貝塚第８類土器、大郷町大松沢貝殻塚貝塚出土土器(註４)と類以しており、大木8ｂ式土器であると考えられる。

第Ⅲ類　第18図5～7、第19図5・10～12・21、第20図6・11の土器で、文様形態・施文方法などから、南方町青島貝塚第９類土器、大郷町上深沢遺跡出土土器（註５）と類以しており、大木９式土器であると考えられる。

〈石器〉　表土・１号土壙から出土している。石錐・石匙・スクレーパーなどの剥片石器、凹石などの礫石器がある（第22図）。

５．まとめ

上野遺跡は、各取川の形成した段丘上に位置し、推定総面積30haという広大な範囲に広がり、時代も縄文時代中期から平安時代に及ぶものである。今回の調査は2.5×4.5ｍという限られた面積のために遺跡の性格を明らかにするには至らなかったが、土壙１基、ピット19個を検出した。土壙は人為的なものとは考えにくく、ピットの組合せ関係も不明である。

出土した縄文土器・石器は、縄文時代中期大木8ａ・8ｂ・９式期のものであり、調査区付近でも縄文時代中期の遺構が存在するものと考えられる。　（金森安孝・主浜光朗）

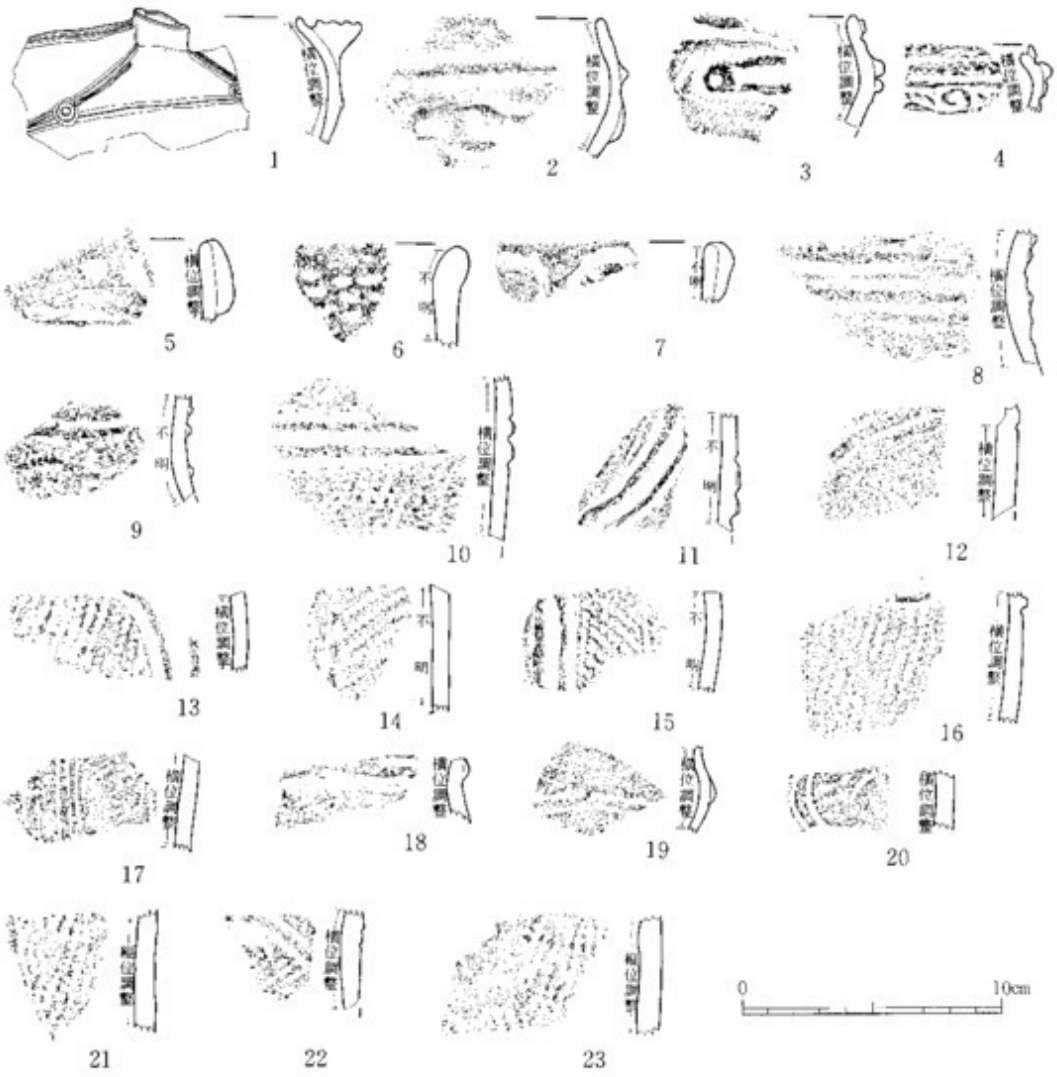
註１　昭和51年に仙台市教育委員会が「第１回仙台市青少年文化財講座」として発掘調査を実施しており、縄文時代中期(大木8ｂ～10式期)～平安時代の遺構・遺物を発見している。

註２　南方町教育委員会『長者原貝塚』南方町文化財調査報告書第１集　昭和53年

註３　南方町史編集委員会編『宮城県登米郡南方町青島貝塚発掘調査報告』昭和50年

註４　加藤孝「陸前国大松沢貝殻塚の研究」『宮城学院女子大学研究論集』9・10　昭和31年

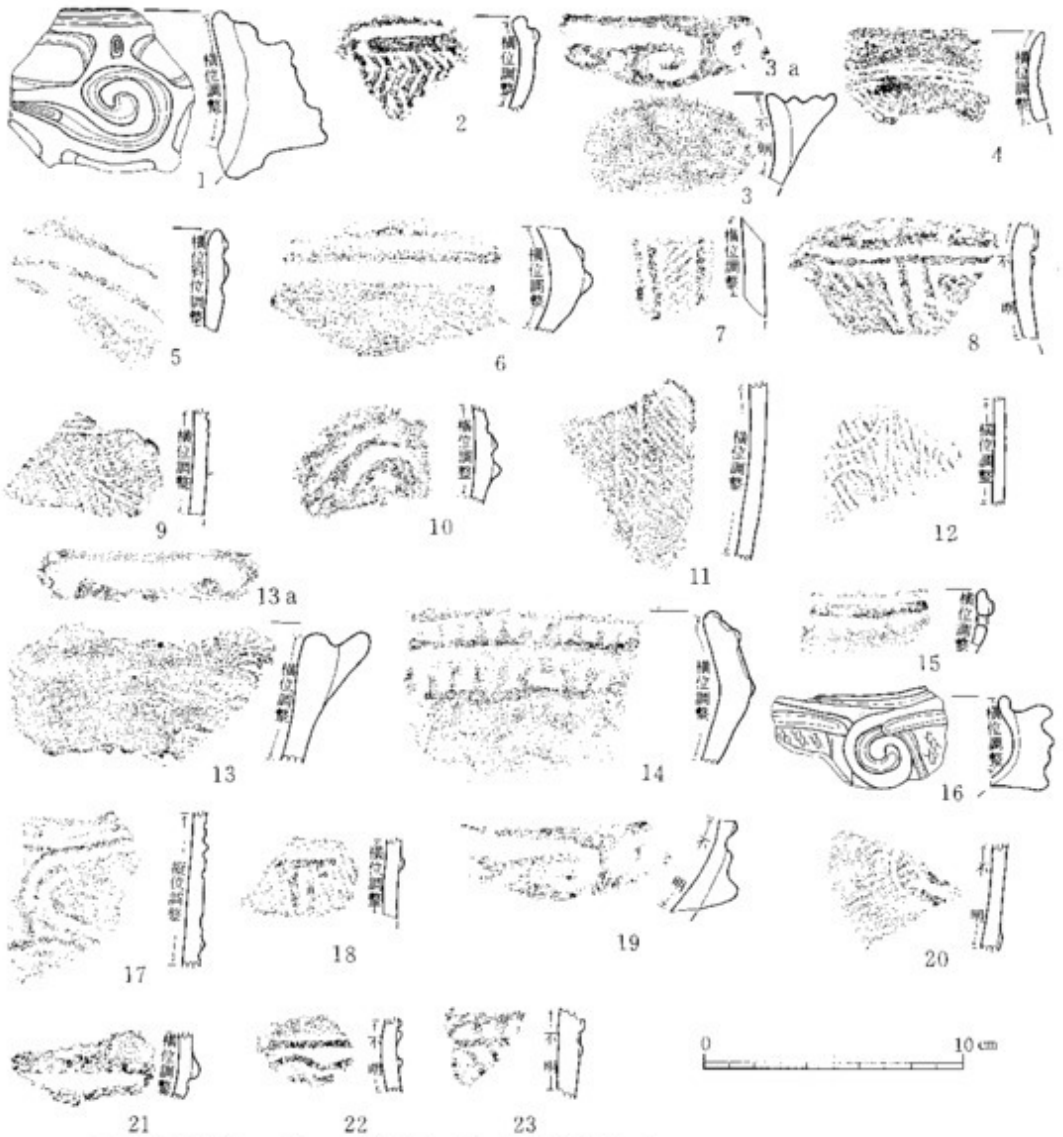
註５　宮城県教育委員会『上深沢遺跡―東北自動車道遺跡調査報告書Ⅰ』昭和53年



1号土壙1層出土土器註記表

No.	部位	外面施文・調整	内面施文・調整	写真No.	備考
1	口縁部	隆線文→沈線文・刺突文・調整（ミガキ）	横位調整（ミガキ）	図版7-3-1	第Ⅱ類 内面にスス状炭化物に着
2	口縁部	隆線文→沈線文	横位調整（ミガキ）	7-3-3	第Ⅱ類
3	口縁部	縄文（L R 横位回転）・隆線文・沈線文・刺突文	横位調整（ミガキ）	7-3-4	第Ⅱ類
4	口縁部	縄文（L R 縦位回転）→隆線文→沈線文	横位調整（ナデ）	7-3-5	第Ⅱ類
5	口縁部	隆線文・沈線文・刺突文	横位調整（ミガキ）		第Ⅲ類
6	口縁部	隆線文→刺突文	不明		第Ⅲ類
7	口縁部	縄文（R L 横位回転）・隆線文・沈線文	不明		第Ⅲ類
8	体部	隆線文・沈線文	横位調整（ナデ）	7-3-2	第Ⅰ類
9	体部	縄文（原体不明）→隆線文	不明	7-3-6	第Ⅰ類
10	体部	縄文（原体不明）→隆線文	横位調整（ミガキ）	7-3-7	第Ⅱ類
11	体部	縄文（L R L 横位回転）・隆線文→沈線文	方向不明（ミガキ）	7-3-8	第Ⅱ類
12	体部	縄文（原体不明）・隆線文・沈線文	横位調整（ミガキ）	7-3-9	第Ⅱ類
13	体部	縄文（L R 横位回転）→隆線文→沈線文	横位調整（ミガキ）	7-3-10	第Ⅱ類
14	体部	縄文（R L 縦位回転）・隆線文	不明	7-3-11	第Ⅱ類
15	体部	縄文（R L 横位回転）→隆線文→沈線文	方向不明（ミガキ）	7-3-12	第Ⅱ類
16	体部	縄文（L R L 横位回転）→隆線文→沈線文	横位調整（ミガキ）	7-3-13	第Ⅱ類
17	体部	沈線文	横位調整（ナデ）		第Ⅱ類
18	体部	隆線文→沈線文	横位調整（ナデ）		第Ⅱ類
19	口縁部	隆線文→沈線文・刺突文→調整（ミガキ）	横位調整（ミガキ）		第Ⅱ類
20	体部	縄文（R L 縦位回転）→沈線文	横位調整（ナデ）		第Ⅱ類
21	体部	縄文（L R L 横位回転）・隆線文・沈線文・	縦位調整（ナデ）		第Ⅱ類
22	体部	縄文（R L 縦位回転）→沈線文	横位調整（ミガキ）		第Ⅱ類
23	体部	撚糸文（L 縦位回転）	縦位調整（ナデ）		第Ⅱ類

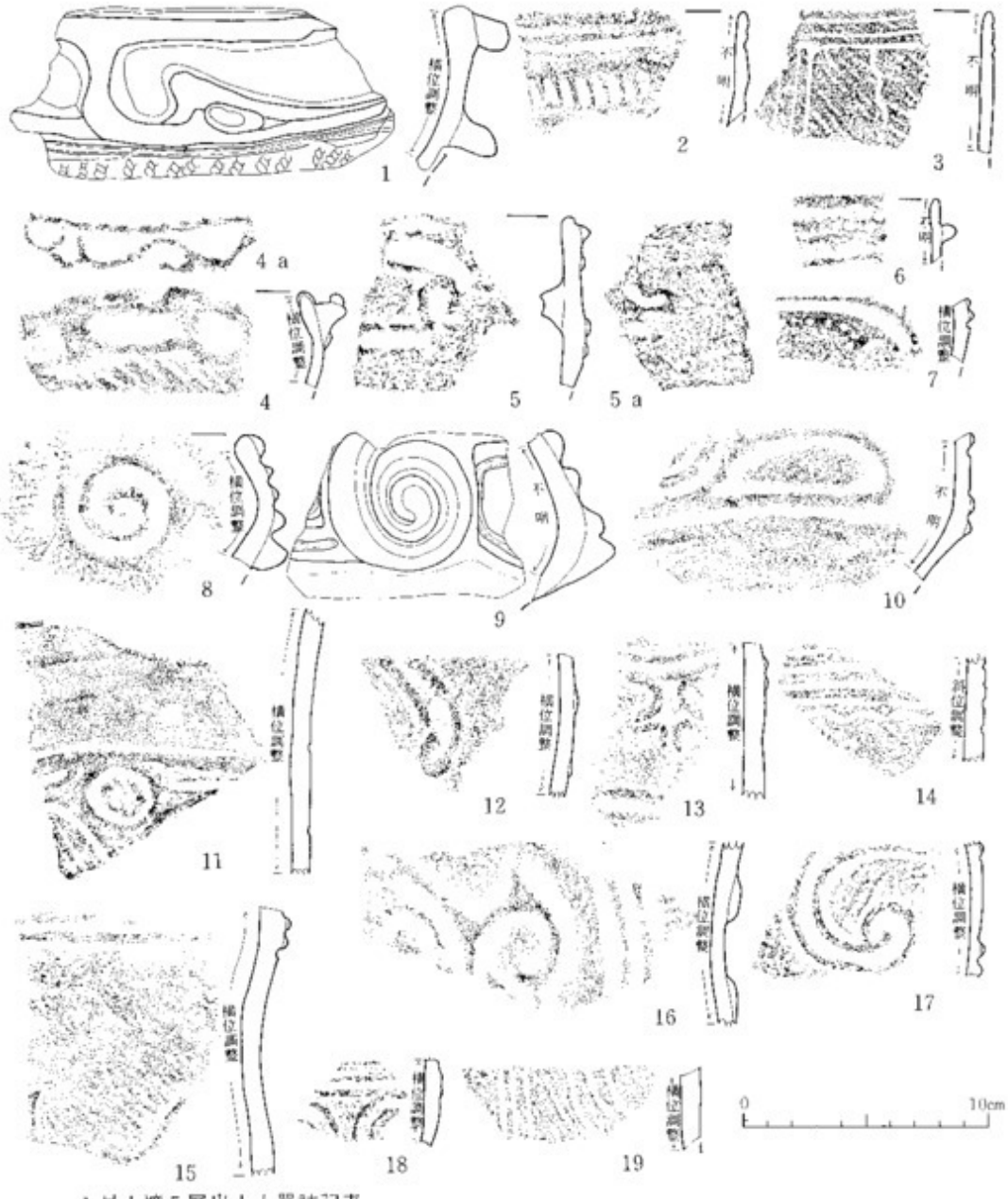
第18図　1号土壙1層出土土器実測図・拓影



1号土壙2層（1～12）・4層（13～23）出土土器註記表

No.	部位	外面施文調整	内面施文調整	写真No.	備考
1	口縁部	隆線文→沈線文・刺突文	横位調整（ミガキ）	図版8-1-1	第Ⅱ類
2	口縁部	隆線文→沈線文・刺目文→刺突	横位調整（ミガキ）	8-1-2	第Ⅲ類
3	口縁部	隆線文→沈線文・刺突文・調整（ミガキ）	不明	8-1-3	第Ⅱ類
4	口縁部	縄文（原体不明）→沈線文	横位調整（ミガキ）	8-1-4	第Ⅲ類
5	口縁部	縄文（L R横位・斜位回転）隆線文→沈線文・刺突・調整（ミガキ）	横位・斜位調整（ミガキ）	8-1-6	第Ⅲ類
6	口縁部	隆線文→沈線文→調整（ミガキ）	横位調整（ミガキ）	8-1-5	第Ⅱ類
7	体部	縄文（L R横位回転）→隆線文	横位調整（ミガキ）	8-1-7	第Ⅰ類
8	体部	縄文（L R縦位回転）→隆線文→沈線文	不明	8-1-8	第Ⅰ類
9	体部	縄文（L R縦位回転）→沈線文	横位調整（ツヂ）	8-1-9	第Ⅱ類
10	体部	縄文（原体不明）隆線文→沈線文	横位調整（ナデ）	8-1-10	第Ⅲ類
11	体部	縄文（L R縦位回転）→沈線文	横位調整（ミガキ）	8-1-11	第Ⅲ類
12	体部	縄文（L R縦位回転）→沈線文	横位調整（ナデ）	8-1-12	第Ⅲ類
13	口縁部	沈線文→調整（ミガキ）	横位調整（ミガキ）	8-2-1	第Ⅱ類
14	口縁部	刺突文→隆線文→調整（ミガキ）	横位調整（ミガキ）	8-2-2	第Ⅰ類
15	口縁部	隆線文→突孔・沈線文→調整（不明）	横位調整（ミガキ）	8-2-3	第Ⅱ類
16	口縁部	縄文（原体不明）隆線文→沈線文	横位調整（ミガキ）	8-2-4	第Ⅱ類
17	体部	隆線文→沈線文	横位調整（ミガキ）	8-2-5	第Ⅰ類
18	体部	縄文（L R縦位回転）→隆線文	横位調整（ミガキ）	8-2-6	第Ⅰ類
19	口縁部	隆線文→沈線文	不明	8-2-7	第Ⅱ類
20	体部	縄文（原体不明）→隆線文→沈線文	方向不明（ミガキ）	8-2-8	第Ⅱ類
21	体部	縄文（R L横位回転）→隆線文→沈線文・調整（ミガキ）	横位調整（ミガキ）	8-2-9	第Ⅲ類
22	体部	縄文（原体不明）→隆線文	不明	……	第Ⅰ類
23	体部	刺突文→隆線文	不明		第Ⅰ類

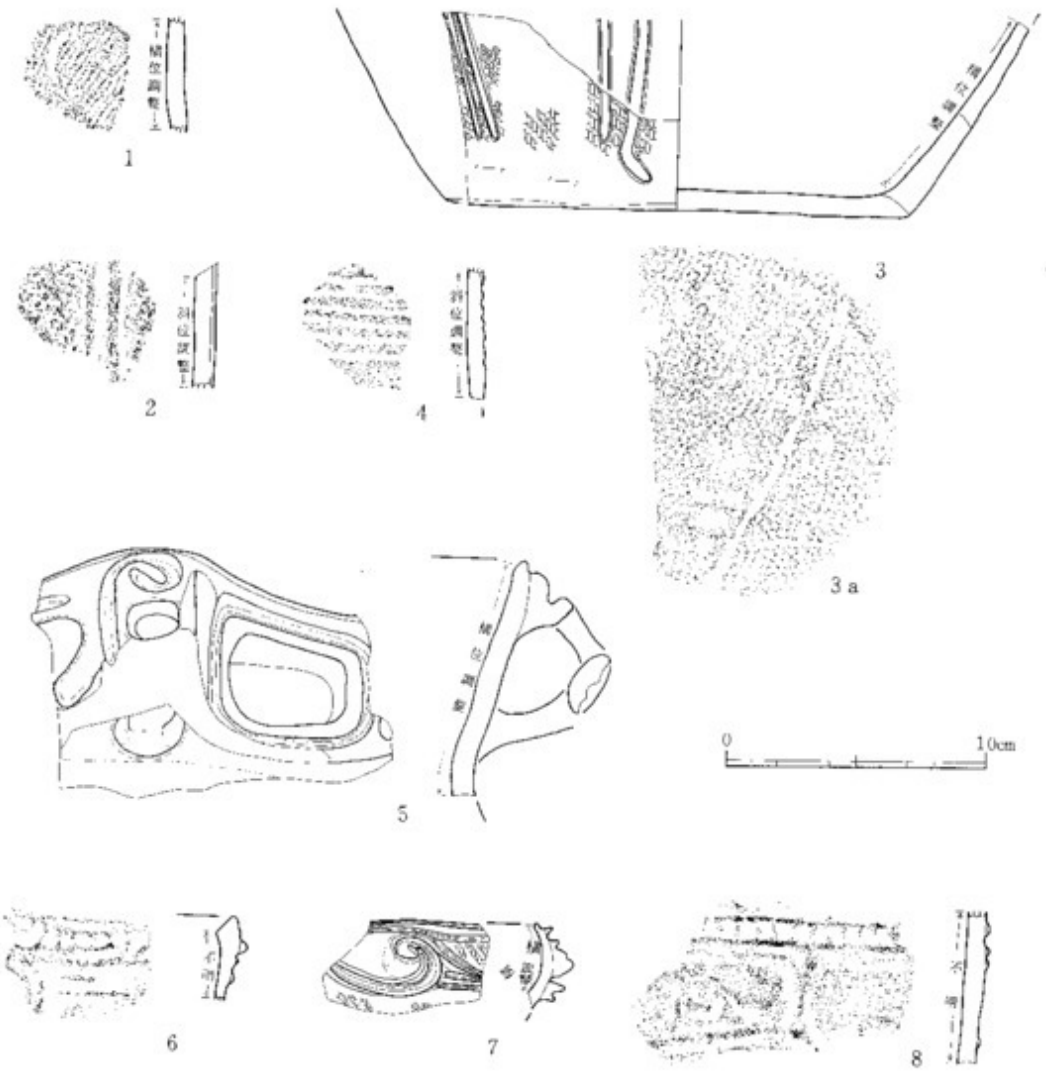
第19図　1号土壙2・4層出土土器実測図・拓影



1号土壙5層出土土器註記表

No.	部位	外面 施文・調整	内面施文・調整	写真No.	備考
1	口縁部	縄文（R L 横位回転）→隆線文→沈線文・調整（ミガキ）	横位調整（ミガキ）	図版8 3-6	第1類 同一
2	口縁部	沈線文・刻目文	不明	8-3-7	第1類
3	口縁部	縄文（R L 横位回転）→沈線文	不明	8-3-3	第1類
4	口縁部	隆線文→沈線文→刻目文	横位調整（ナデ）	8-3-1	第1類
5	口縁部	隆線文→沈線文	隆線文・調整不明	8-3-2	第1類
6	口縁部	隆線文→刻目文	不明	9-1-3	第1類
7	口縁部	隆線文・沈線文・刻目文	横位調整（ミガキ）	9-1-2	第1類
8	口縁部	縄文（L R 横位回転）→隆線文→沈線文	横位調整（ミガキ）		第1類
9	口縁部	縄文（原体不明）→隆線文→沈線文	不明	9-1-3	第1類
10	口縁部	縄文（原体不明）→隆線文→沈線文	不明	9-1-1	第1類
11	口縁部	縄文（R L 横位回転）→隆線文→沈線文→調整（ミガキ）	横位調整（ナデ）	9-2-6	第1類
12	体部	縄文（原体不明）→隆線文	横位調整（ナデ）	8-3-5	第1類
13	体部	隆線文・調整（ミガキ）	横位調整（ナデ）	8-3-4	第1類
14	体部	縄文（R L 横位回転）→沈線文	斜位調整（ナデ）	8-3-6	第1類
15	体部	縄文（L R 横位回転）→隆線文→沈線文	横位調整（ミガキ）	9-1-5	第1類
16	体部	縄文（L R 横位・縦位回転）→隆線文→沈線文	横位調整（ミガキ）	9-1-6	第1類
17	体部	縄文（L R 横位回転）→隆線文→沈線文	横位調整（ミガキ）	9-1-7	第1類
18	体部	縄文（R L 横位回転）→隆線文	横位調整（ミガキ）	9-2-1	第1類
19	体部	縄文（R L 横位回転）→沈線文	横位調整（ナデ）	9-2-2	第1類

第20図　1号土壙5層出土土器実測図・拓影



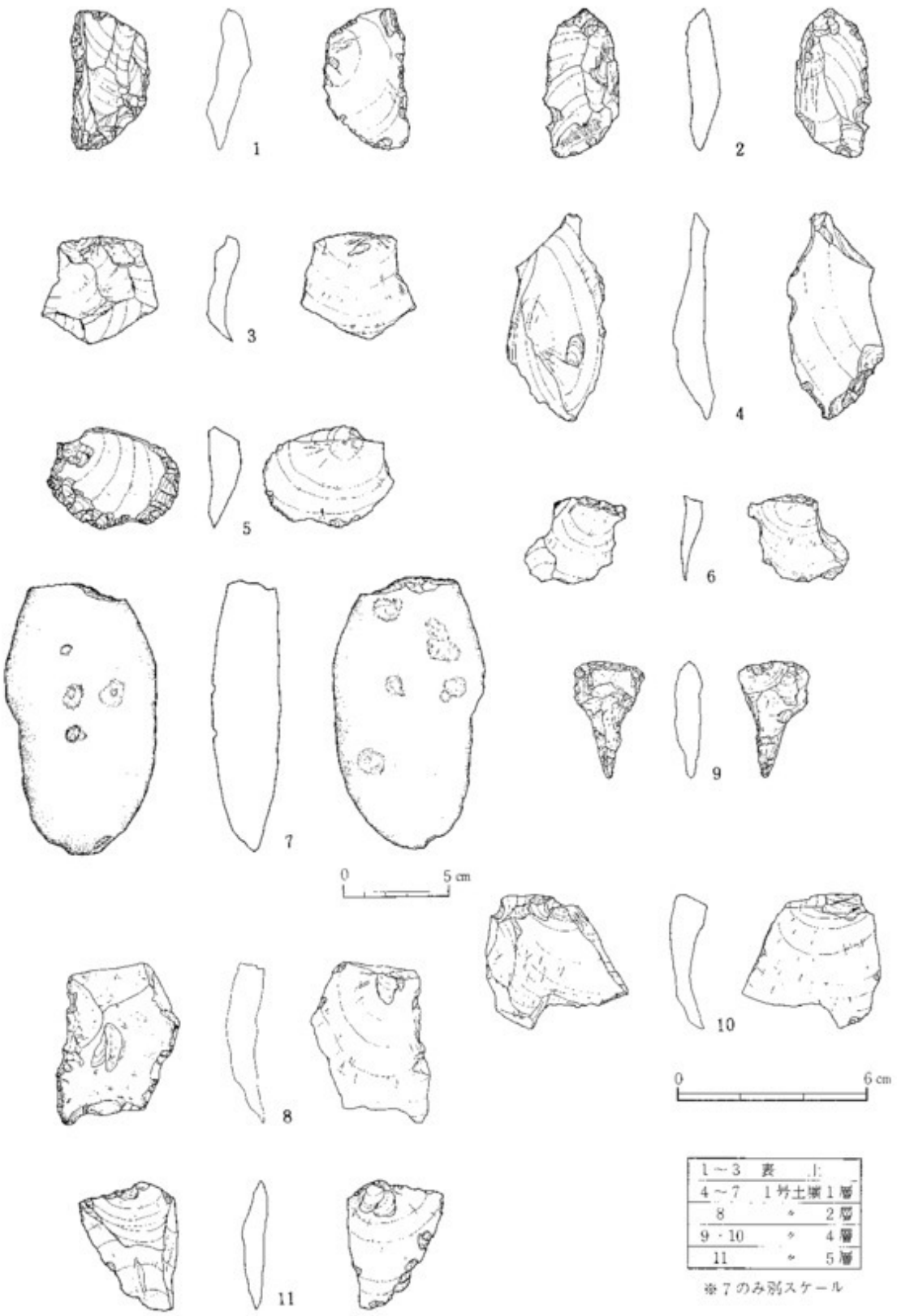
1号土壙5層（1～4）・8層（5）出土土器註記表

No.	部位	外面施文・調整	内面施文・調整	写真No.	備考
1	体部	縄文（LRL横位回転）→沈線文	横位調整（ミガキ）	図版9-2-3	第Ⅱ類
2	体部	縄文（原体不明）→隆線文→沈線文	斜位調整（ミガキ）	9-2-4	第Ⅱ類
3	底部	縄文（LR横位回転）→隆線文→調整（ナデ）	横位調整（ナデ）	9-2-5	第Ⅱ類
4	体部	隆線文→沈線文	斜位調整（ミガキ）	9-2-8	
5	口縁部	隆線文→沈線文→調整	横位調整（ミガキ）	9-3-1	第Ⅰ類

ピット出土土器註記表

No.	部位	外面施文・調整	内面施文・調整	写真No.	備考
6	口縁部	隆線文→刺突文	不明	図版9-3-2	第Ⅰ類
7	口縁部	縄文（RL横位回転）→隆線文→沈線文	横位調整（ミガキ）	9-3-3	第Ⅱ類
8	体部	隆線文→沈線文・刺突文	不明	9-3-4	第Ⅰ類

第21図　1号土壙5・8層，ピット出土土器実測図・拓影



1～3	表土	
4～7	1号土壙	1層
8	〃	2層
9・10	〃	4層
11	〃	5層

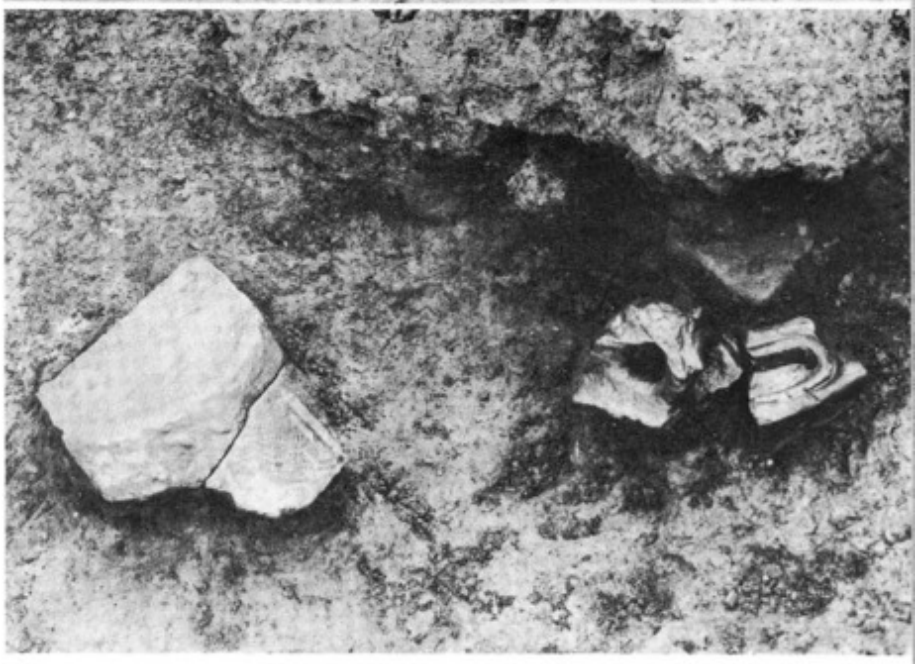
※7のみ別スケール

第22図　表土・1号土壙出土石器

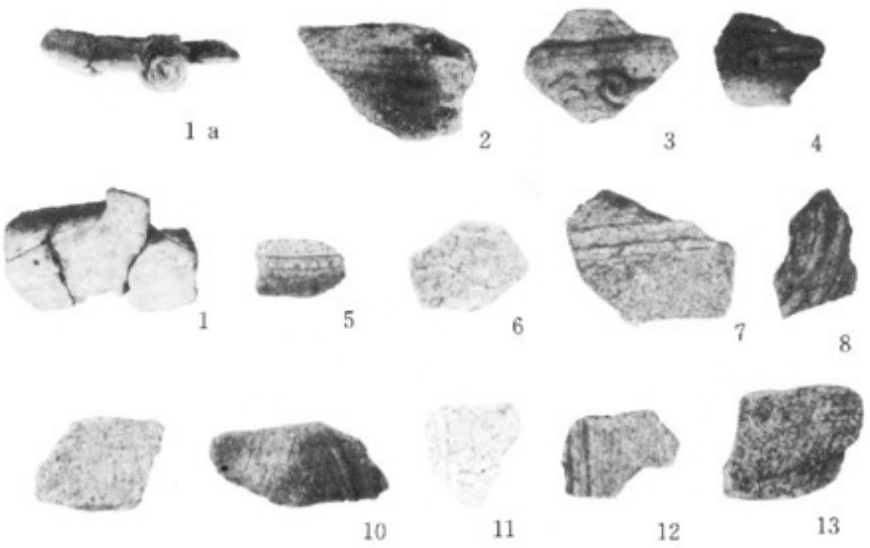
図版7

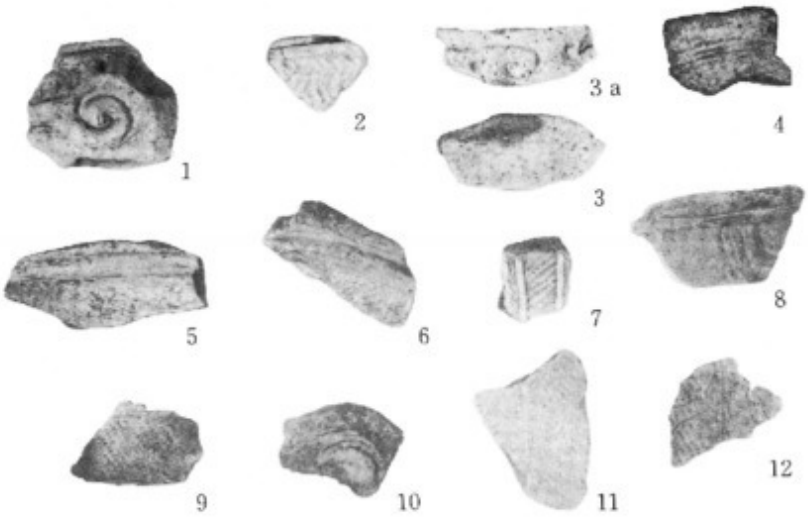
1．調査区全景

2．1号土壙底面遺物出土状況

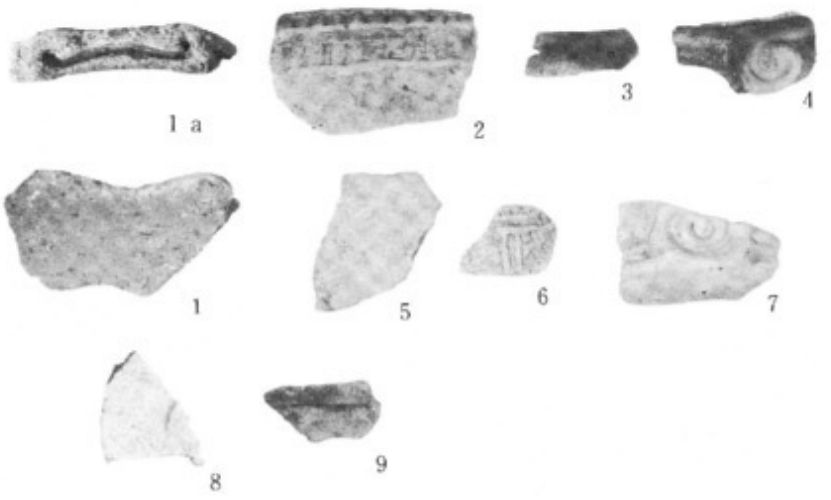


3．1号土壙1層出土土器

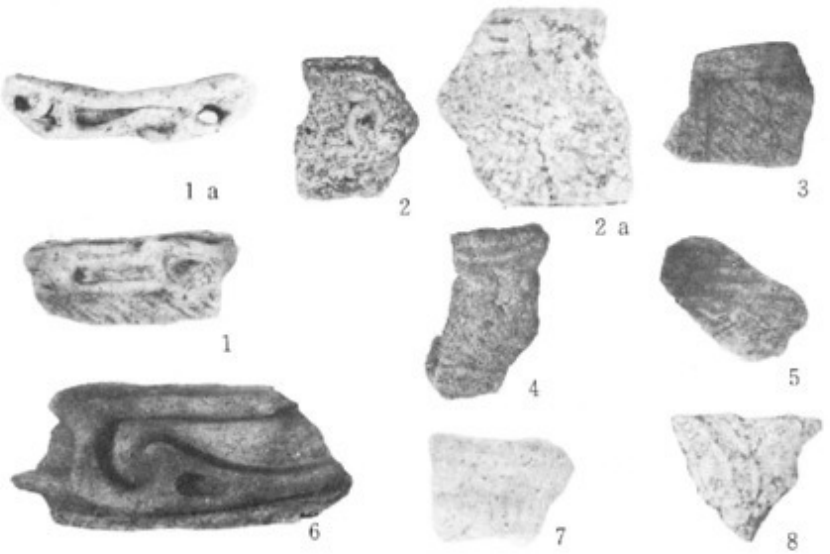




1．1号土壙2層出土土器



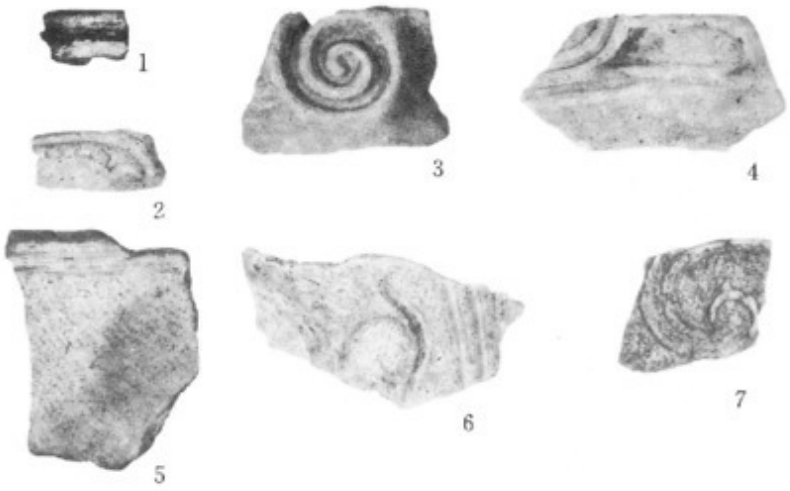
2．1号土壙4層出土土器



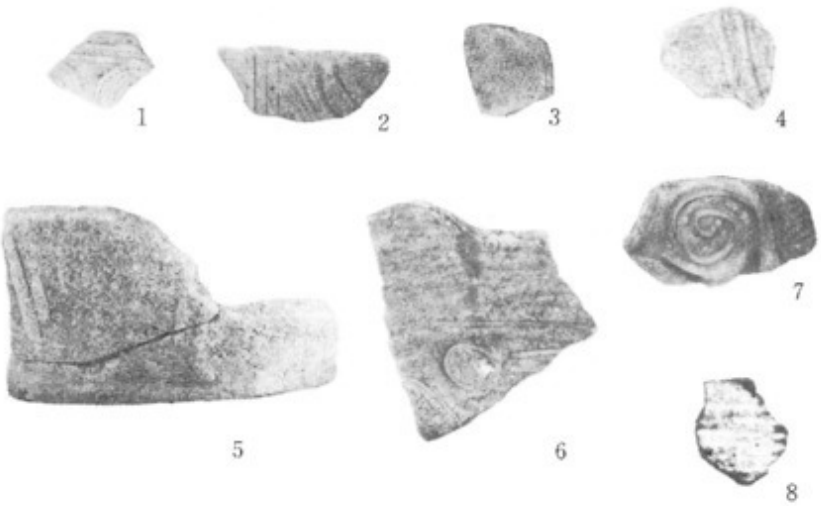
3．1号土壙5層出土土器

図版９

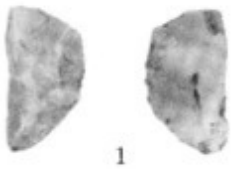
１．１号土壙５層出土土器



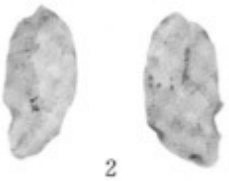
２．１号土壙５層出土土器



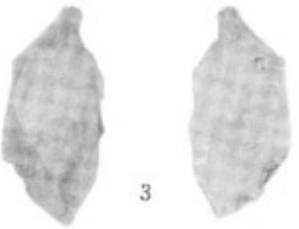
３．１号土壙８層、ピット出土土器



1

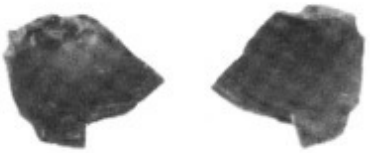


2

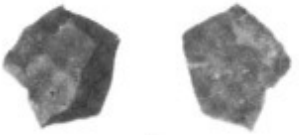


3

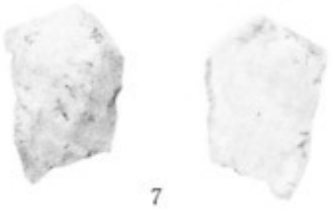
4



5



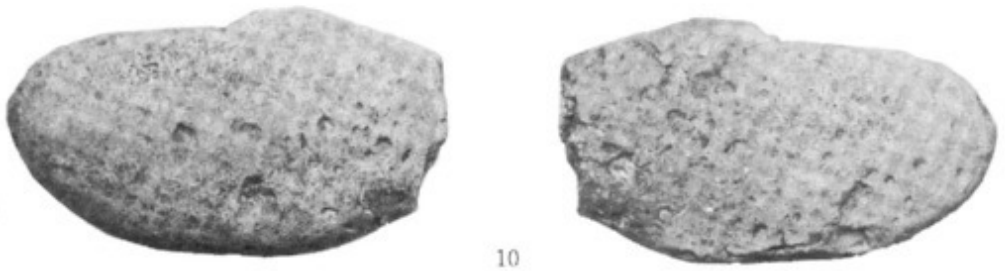
6



7

8

9



10

図版10　　表土・1号土壙出土石器

〔4〕郡山遺跡

1．遺跡の位置と環境

遺跡は郡山2～6丁目に及び、西は東北本線から東は仙台バイパスまで、南は諏訪神社から北は八本松との境界付近まで、東西800m、南北900mの広がりが考えられる。この中で、推定方四町外郭線の官衙ブロックは、中央北寄りの一角を占めている。

周辺には、西台畑・的場・篭ノ瀬・矢来・欠ノ上遺跡、古碑群、北目城跡などの遺跡がありこの地域は縄文時代から現在まで連綿と文化が受け継がれて来た地域といえる。また、南、北東に河川、西に丘陵という三角地帯の東辺に位置するこの地区は、天然の要衝ともいえよう。

2．調査経過

(1)**第19次発掘調査**　4×2.5mの調査区を設定した。1～4層は若干の遺物を含むが、攪乱層である。地表より約60cm掘り下げ、5層上面で竪穴住居跡1軒、土壙2基を検出した。

(2)**第20次発掘調査**　1×9mの調査区を設定した。5層目で地山の黄燈色シルト質粘土を検出し、この上面で掘立柱建物跡柱穴1基、土壙1基、溝跡1条を検出した。

(3)**第21次発掘調査**　2×6mの調査区を設定した。表土を約70cm掘り下げたところで、暗緑灰色砂質シルトの水田床土を検出した標高10.5m前後で、地山土の黄褐色砂質シルトを検出した。その下層には、にぶい黄褐色砂層があり、旧河川跡と考えられる。

(4)**第22次発掘調査**　3×2.6mの調査区を設定した。表土を1.2m掘り下げたところで、厚さ15～20cmの黒褐色シルト質粘土の旧水田床土を検出、この床土直下で、東西方向に延びる溝跡1条を検出した。

3．発見遺構・出土遺物

(1)第19次発掘調査

ＳＩ79住居跡　全形は不明であるが壁は残存高10～15cm、床面はほぼ平坦で貼床が一部に残存している。また、性格は不明であるが、床面から掘り込まれた5個のピットも検出された。カマドは東壁に設置されており、凝灰岩切石の2本の支脚を有し、遺存状態は良好である。袖部は黄褐色粘土で構築されている。住居跡貼床の下層から旧住居の堆積土が、左袖部から旧カマドの痕跡が、住居跡外側から煙道がそれぞれ検出され、住居の造り替えが考えられる。遺物は住居跡堆積土から土師器高坏、須恵器平瓶・坏・蓋、円形石製品・土製品・琥珀、カマドから須恵器蓋、格子叩き目の平瓦が、旧煙道部から刀子が出土している。住居跡の出土遺物の中で土師器坏の出土量がきわめて多い。

第23図　発掘調査区位置図

ＳＫ80土壙　円形と考えられる土壙の一部を検出した。壁高は10～30cmで、堆積土は褐色砂質シルトである。ＳＩ79住居跡を切って掘り込まれており、出土遺物には須恵器蓋がある。

ＳＫ81土壙　一部のみ検出されたため全形は不明である。壁高は30cmで、堆積土は上層が黒褐色粘土質シルト、下層がにぶい黄褐色砂質シルトである。ＳＩ79住居跡を切って掘り込まれており、土師器壺、円面硯を出土している。

(2)第20次発掘調査

ＳＢ208掘立柱建物跡　調査区東側で検出、掘り方は１辺70cm前後の方形で深さ80cm、柱痕跡直径が約20cmである。１基のみであるため、建物の方向・規模についての詳細は不明である。

ＳＫ209土壙　平面は不整方形で断面が逆台形を呈し、壁高が約80cmである。直径11cm、高さ８cmの曲物が出土した。土壙についての詳細は不明である。

ＳＤ210溝跡　調査区西側で検出し、幅10～20cm、深さ２～３cmである。堆積土中より少量の土師器片を出土した。

(3)第21次発掘調査

調査区は地山土まで攪乱が及んでおり、遺構・遺物は検出されなかった。

(4)第22次発掘調査

ＳＤ212溝跡　東西方向に延びる溝で、推定方四町南辺の大溝と考えられる。幅は不明、深さは約55cmである。暗褐色粘土の堆積土２層が、径３～10cmの河原石を多量に包含していた。出土遺物には、土師器坏・甕・壺、須恵器坏・甕がある。土師器壺は頸部片であるが、内面には厚く漆が付着している。また、溝跡検出面の下層より、内外面朱塗りの土師器甕の口縁部破片が１点、旧水田床土から熨斗瓦と考えられる破片１点が出土している。

４．まとめ

第19次調査で検出されたＳＩ79住居跡の床面、カマド出土の土師器坏は全て郡山遺跡で分類している坏Ｉ類に属する。この坏Ｉ類の土器は、いわゆる在地系の土器類とは明確に区別できるものであり、関東地方の鬼高式終末期から真間式初期に見られるものであり、この住居跡は８世紀前半のものと考えたい。これらのことから、官衙域内には関東系土器を使用した人々が居住していたといえるだろう。しかし、官衙域内でこうした竪穴住居がどの様な役割、性格を帯びたものであったのかは、昭和57年度から始まる推定方四町官衙域内の発掘調査の成果を待って、検討していきたい。

（加藤正範・金森安孝・長島栄一）

（「(4)郡山遺跡」についての詳細は、仙台市文化財調査報告書第38集「郡山遺跡Ⅱ－昭和56年度発掘調査概報―」を参照されたい。）

職　員　録

社会教育課

課　長	永野昌一	
主　幹	早坂春一	

文化財管理係

係　長	鈴木昭三郎	
主　査	鈴木高文	(10月1日異動)
主　事	山口　宏	
〃	渡辺洋一	

文化財調査係

係長(兼)	早坂春一	
教　諭	佐藤　陸	
〃	渡辺忠彦	
〃	佐藤　裕	
〃	加藤正範	
主　事	田中則和	
〃	結城慎一	
〃	成瀬　茂	
教　諭	青沼一民	
主　事	柳沢みどり	
〃	木村浩二	
〃	篠原信彦	
〃	佐藤　洋	
〃	金森安孝	
〃	佐藤甲二	
〃	吉岡恭平	
〃	工藤哲司	
〃	渡部弘美	
〃	主浜光朗	
〃	斎野裕彦	
〃	長島栄一	
〃	荒井　格	
臨時職員	高橋勝也	

仙台市文化財調査報告書刊行目録

第1集　天然記念物盛屋下セコイヤ化石林調査報告書（昭和39年4月）
第2集　仙台城（昭和42年3月）
第3集　仙台市燕沢善応寺横穴古墳群調査報告書（昭和43年3月）
第4集　史跡陸奥国分尼寺跡環境整備並びに調査報告書（昭和44年4月）
第5集　仙台市南小泉法領塚古墳調査報告書（昭和47年8月）
第6集　仙台市荒巻五本松窯跡発掘調査報告書（昭和48年10月）
第7集　仙台市富沢裏町古墳発掘調査報告書（昭和49年3月）
第8集　仙台市向山愛宕山横穴群発掘調査報告書（昭和49年5月）
第9集　仙台市根岸町宗禅寺横穴群発掘調査報告書（昭和51年3月）
第10集　仙台市中田町安久東遺跡発掘調査概報（昭和51年3月）
第11集　史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報（昭和51年3月）
第12集　史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報（昭和52年3月）
第13集　南小泉遺跡—範囲確認調査報告書—（昭和53年3月）
第14集　栗遺跡発掘調査報告書（昭和54年3月）
第15集　史跡遠見塚古墳昭和53年度環境整備予備調査概報（昭和54年3月）
第16集　六反田遺跡発掘調査（第2・3次）のあらまし（昭和54年　）
第17集　北屋敷遺跡（昭和54年3月）
第18集　枡江遺跡発掘調査報告書（昭和55年3月）
第19集　仙台市地下鉄関係分布調査報告書（昭和55年3月）
第20集　史跡遠見塚古墳昭和54年度環境整備予備調査概報（昭和55年3月）
第21集　仙台市開発関係遺跡調査報告1（昭和55年3月）
第22集　経ケ峯（昭和55年3月）
第23集　年報1（昭和55年3月）
第24集　今泉城跡発掘調査報告書（昭和55年8月）
第25集　三神峯遺跡発掘調査報告書（昭和55年12月）
第26集　史跡遠見塚古墳昭和55年度環境整備予備調査概報（昭和56年3月）
第27集　史跡陸奥国分寺跡昭和55年度発掘調査概報（昭和56年3月）
第28集　年報2（昭和56年3月）
第29集　郡山遺跡Ⅰ—昭和55年発掘調査概報—（昭和56年3月）
第30集　山田上ノ台遺跡発掘調査概報（昭和56年3月）
第31集　仙台市開発関係遺跡調査報告Ⅱ（昭和56年3月）
第32集　鴻ノ巣遺跡発掘調査報告書（昭和56年3月）
第33集　山口遺跡発掘調査報告書（昭和56年3月）
第34集　六反田遺跡発掘調査報告書（昭和56年12月）
第35集　南小泉遺跡都市計画街路建設工事関係第一次調査報告（昭和57年3月）
第36集　北前遺跡発掘調査報告書（昭和57年3月）
第37集　仙台平野の遺跡群Ⅰ—昭和56年度発掘調査報告書—（昭和57年3月）
第38集　郡山遺跡Ⅱ—昭和56年度発掘調査概報—（昭和57年3月）

仙台市文化財調査報告書第37集

仙台平野の遺跡群Ⅰ—昭和56年度発掘調査報告書—

昭和57年3月

発行　仙台市教育委員会
仙台市国分町3－7－1
仙台市教育委員会社会教育課

印刷　株式会社東北プリント
仙台市立町24－24　TEL 63－1166